早稲田大学ホッケー部
百周年記念誌

1922年～2022年

早稲田大学ホッケー部

稲門ホッケー倶楽部

目次

ご挨拶

早稲田大学ホッケー部創設百周年記念に寄せて 3
早稲田大学ホッケー部部長　中村信男
早稲田大学ホッケー部創設百年を迎えて 4
稲門ホッケー倶楽部会長　和田明仁

祝辞

早稲田大学ホッケー部創設百周年に寄せて 5
早稲田大学総長　田中愛治

早稲田大学ホッケー部創設百周年に寄せて 6
公益社団法人　日本ホッケー協会会長　三須和泰

早稲田大学ホッケー部創設百周年に寄せて 8
三田ホッケークラブ会長　松本光弘

ホッケー部の歴史

1. 創設の経緯 9
2. 体育会加入の経緯 11
3. 大学対抗戦と第 1 回早慶戦 14
4. ロサンゼルスオリンピック銀メダル 15
5. 女子部の創設 16

インタビューと寄稿

1. 戦前のホッケー部　佐藤守さん（1941 年卒）インタビュー 18
2. 戦後の復興　阿左美利男さん（1951 年卒）インタビュー 20
3. ローマオリンピックの想い出　中山弘さん（1957 年卒）インタビュー 22
4. 昭和 30 年代の想い出　佐野二郎さん（1964 年卒）インタビュー 24
5. 幻のミュンヘンオリンピック　和田明仁さん（1969 年卒）インタビュー 26
6. 全日本学生選手権優勝物語　古田俊次さん（1970 年卒）インタビュー 28
7. 早稲田大学黄金期を語る　宮本隆三（1968 年卒） 30
8. 関西支部の活動　井上栄之助（1976 年卒） 31

9. 稲天寮物語　仁賀建夫（1982 年卒）..... 32
10. ホッケー部創設百周年に寄せて　小田洋一郎（1985 年卒）..... 33
11. 第 61 回全日本ホッケー選手権大会優勝と当時の様子を顧みて田村保（1988 年卒）　35
12. 女子部創設　伊東佳織（1994 年卒）..... 37
13. We are Hockey Family　藤本一平（2011 年卒）..... 38
14. 紡がれていく繋がりとともに　三柴明日香（2014 年卒）..... 40
15. ホッケーを通じた縁　本名江里（2016 年卒）..... 41
16. 101 年目の抱負　中島丞一郎（2023 年度男子部主将）..... 43
17. 101 年目の抱負　吉野真啓（2023 年度女子部主将）..... 43

100 年の歩み

1. 年表..... 45
2. 戦績一覧 46
3. 早慶ホッケー定期戦戦績..... 48
4. 過去の周年事業記念写真..... 49
5. オリンピック出場選手 50
6. ホッケーを支える卒業生..... 51

歴代部長・監督・稲門ホッケー倶楽部会長..... 53

卒業生名簿 55

現役チームの監督・コーチ 58

編集後記.....59

早稲田大学ホッケー部創設百周年記念に寄せて

早稲田大学ホッケー部部長
商学学術院教授
中村　信男

早稲田大学ホッケー部が 2022 年を以て創設百周年を迎えることに対し、心よりお祝いを申し上げます。この間、第 2 次世界大戦等、大学の部活動としてホッケー競技を続けることを困難ならしめる事態が発生したことも事実であり、当時のホッケー部関係者は大変苦労されたと拝察します。しかし、関係者の努力で、そのような苦難を克服するとともに、多くの優れたアスリートを輩出して、この度めでたく創設百周年という節目の年を迎えるに至ったことで、現役部員はもとより、歴代の OB 会会長および現在の和田会長ならびに OB・OG 会組織を支えてこられた多くの OB・OG の皆さんは、感無量であろうと推察します。

私は、ホッケー部長に就任してから 10 年超の期間が経過しています。ホッケー競技は、まったく経験がありませんが、毎年恒例となっている慶応義塾ホッケー部との定期戦等を観戦する機会を得たことで、素人ながら、この競技のスピード感やダイナミックさに魅了されました。また、現役部員の皆さんとの交流を経て、大学で部活動に従事する学生諸君が文字通り文武両道を実践している姿と、アスリートらしい折り目の正しさや礼儀正しさ等に触れたことで、大学スポーツの素晴らしさに改めて気付かされた次第です。それだけに、伝統と歴史のある早稲田大学ホッケー部の現役の部長として、同部の創設百周年に臨み、記念式典を始めとする様々なイベントに参加することができたことは、大変光栄であるとともに、誠に幸運であると思うところです。

その一方で、ホッケーがわが国では必ずしもメジャーな競技スポーツではないこともあり、当部としての持続的な発展を如何に確保していくかが、大きな課題であるとの認識を新たにしています。百周年は、次の 100 年に向けた通過点でもあるので、サステナビリティの観点から、将来に亘る安定的な部員確保にこれから取り組んでいく必要があります。そのためには、早稲田大学ホッケー部が強くならなければなりませんから、百周年を心よりお祝いすると同時に、強く気を引き締め、関係者が一丸となって、部の一層の発展に向け様々な取組みを行なっていかなければならないと考えます。

しかし、こうした取組みは、早稲田大学ホッケー部自体の努力のみでは十分に成し得ません。これまで、大学から様々な側面支援を頂戴してきましたが、改めて、なお一層のご助力を賜りたく、この場を借りてお願い申し上げます。

最後になりましたが、早稲田大学ホッケー部の益々の発展と、現役部員を含む部関係者の皆様のご多幸をお祈り申し上げ、私の祝辞といたします。

早稲田大学ホッケー部創設百年を迎えて

稲門ホッケー倶楽部会長
和田　明仁

今年、早稲田大学ホッケー部は創設百年を迎えました。1922 年に喜多壯一郎教授の指導の下、学生によるスケートホッケー部として活動をはじめ、1924 年に早稲田大学体育会の部として正式に創部しています。大学では、慶應義塾、明治大学に次いで、3 番目の創部で、大日本ホッケー協会の創設や、大学対抗戦の開催など、ホッケーの普及・振興に主導的な役割を果たしてきました。

競技成績としても、この 100 年の間に、全日本選手権優勝 9 回（全早大を含む)、インカレ優勝 1 回等、輝かしい成績を残すとともに 11 名のオリンピック選手を輩出し、うち 4 人が銀メダルを持ち帰っています。

また、1991 年には女子部が発足し、1993 年に体育会の部として活動を始めました。早慶ホッケー定期戦は、男子部は 1924 年から始まり、男子部は 96 回の対戦で 39 勝 39 敗 18 分、女子部は 1993 年から始まり、30 回の対戦で 19 勝 9 敗 2 分という戦績です。

100 年を築いてきた卒業生は、男子部 466 名、女子部 124 名を数え、現在 391 名の OB/OG が学生時代の思い出を胸に、各分野で活躍しています。

残念ながら、最近 10 年は、全国大会の決勝にまで駒を進めることができていません。その理由として、ルール変更で選手交代が自由になり選手を多く集めることがチーム力に必要不可欠になったなかで、技術力をもった選手に入学してもらえていないことがあります。現在、地域に稲門ホッケー倶楽部の支部を作り、その地域の優秀な選手をスカウトする活動を始めました。また、百周年を機に募集した寄付金などを活用して購入した電子機器を使って、自軍や他校のデータを蓄積、分析することにより、戦術、戦略の高度化を目指しています。

100 年を振り返ると、戦争などの幾多の苦労を乗り越えてきた歴史があります。その努力をしてきた先輩たちに今更ながら深く感謝すると同時に、次の 100 年を見据え、我々もしっかりと強い早稲田大学ホッケー部を再建し、継続させていくと決意をする次第です。

早稲田大学ホッケー部創設百周年に寄せて

早稲田大学総長
田中　愛治

早稲田大学ホッケー部が百周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。輝かしい歴史の数々を作り上げてこられたOB・OGの皆様、現役選手諸君、日ごろから暖かいご支援ご協力を頂いている全ての関係者の方々に、早稲田大学を代表して心からの敬意を表し、深く御礼申し上げます。

ホッケー部は1922年にスケートホッケー部として活動開始、翌年には大日本ホッケー協会選抜大会に出場、1946年に体育会27番目の部「ホッケー部」として登録、現在に至る早稲田の団体球技の中でも特に長い歴史のある部の一つです。その間、全日本ホッケー選手権で9回、全日本学生ホッケー選手権で1回、関東学生ホッケーリーグで21回の優勝をするなど、輝かしい伝統と実績を積み重ねて来られました。世界の舞台では、1932 年ロサンゼルスオリンピックにおいて、OBの廣瀬藤四郎監督率いるホッケー日本代表チームに選手として本学から4名が加わり、団体球技競技では日本最初のメダルとなる銀メダルを獲得したという輝かしい記録があり、その後も多くのオリンピアンを輩出しました。なお、そのメダルは競技スポーツセンターに寄贈、保管され、2023年2月から5月の間早稲田スポーツミュージアムに展示されます。近年では有力選手の入学が難しい中、男女とも関東学生リーグ1部の座を守り続けていることは賞賛すべき成果であります。

早稲田大学は、創設者大隈重信が語った「世の中にたって大事をなしうるものは、身体の強健なるものに限る。身体の強健を得るには、ぜひ運動でなければならぬ」という言葉に示されるように、一世紀以上にわたり、人材育成におけるスポーツの必要性を重視してまいりました。本学の新しい中長期計画“Waseda Vision 150”では、スポーツを通じてたくましく育った学生たちが、同時に幅広い教養を身に着け、多様な分野で一流の人材として世界中で活躍できるよう、WAP（早稲田アスリートプログラム）をはじめとした各種の環境整備を推進しているところです。ホッケー部が100年の歴史の中で、文武両道を体現した数多くの有為な人材を輩出してきたことに心よりの敬意を表するとともに、これからもホッケーを通じて、自ら限界に挑み続けるとともに、健全な肉体と精神をもち、豊かな人間力と実行力を兼ね備えたリーダーを率先して送り出す、体育各部の模範的存在であり続けることを期待します。

百周年を機に、ホッケー部が更なる飛躍を見せてくれることを楽しみにしています。現役選手諸君にはこれからも厳しい練習で磨き上げた実力を発揮し、果敢に挑戦し続けることを期待するとともに、OB・OG の皆様のますますのご健勝とご活躍をお祈りし、お祝いの挨拶とさせていただきます。

早稲田大学ホッケー部創設百周年に寄せて

公益社団法人日本ホッケー協会会長
三須　和泰

早稲田大学ホッケー部が活動を開始されてから百年という感嘆すべき歴史の 1 ページが日本ホッケー界の歴史に書き加えられましたことを、心からお慶び申し上げます。チームの実績と輩出された選手の方々の功績は日本ホッケー界の発展に多大な貢献をもたらされました。これもひとえに OB・OG、現役選手の皆様の熱意と努力の賜物であると心からの敬意を表します。

個人的なお話ですが、1972 年インターハイの一回戦が行われたのが東伏見ホッケーグランドでした。その後も関東大学ホッケーリーグで何度も東伏見を訪れましたが、1978 年の一部二部入替戦で早稲田大学に敗れて一部昇格を果たせなかった、思い出深いグランドでした。

2023 年は日本ホッケー協会の前身である大日本ホッケー協会が創立されて百年目に当たります。協会ホームページを開きますと、大正 12 年（1923 年）11 月に催された発会式に慶應、明治、東京クラブ、陸軍戸山学校と並んで早稲田大学の名前を見ることができます。しかもその長い歴史の中で、全日本選手権や全日本学生選手権での優勝経験も豊富な強豪チームです。また、オリンピックのチームゲームで日本選手団史上初めてメダルを獲得した 1932 年ロサンゼルス大会に監督を始め多くの代表選手を送り出されたことなど、長きにわたり日本ホッケー界を支えていただいたことに改めて感謝申し上げます。

皆様ご存知の通り 2021 年には東京 2020 オリンピックが 57 年ぶりに開催されました。日本代表チームは 2018 年のジャカルタでのアジア競技大会で男女揃って優勝してアジアチャンピオンとして、男子は 53 年ぶりの出場を、女子はアテネ大会以降 5 大会連続出場を果たし、国際的な競技力の向上が進んでいます。また、東京 2020 大会を機に新設された大井ホッケー競技場のレガシー活用を日本ホッケー界全体としての重要な課題と位置づけ、ホッケー界の聖地として最大限活用すべく、2030 年のワールドカップの招致・開催を目指しています。またホッケー競技の継続的な普及・発展を目指し、全国的な取り組みとしてオリンピアンを指導者に、「夢見るホッケー教室」を開催するなど、次世代の育成に努めております。一方、2022 年 10 月にはマスターズワールドカップを大井ホッケー競技場で開催することができ、生涯スポーツとしてのホッケーも花開きつつあります。

このような機運の中で、早稲田の OB・OG の方々は男子代表サムライジャパンのヘッドコーチを始め、大学や高校チームの監督やコーチ、審判員、競技役員、ジュニアホッケー教

室の指導員、そして国際ホッケー連盟、アジアホッケー連盟や日本ホッケー協会の役員や職員まで多岐にわたって活躍され、日本のみならず世界のホッケー界の発展に貢献いただいていることに対し改めて敬意を表します。

この栄えある百年という区切りをゴールとせずに、通過点として、あるいはジャンプ台として、伝統ある早稲田の OB・OG の皆様、現役選手の皆様が手を携えて、日本ホッケーの次の 10 年、更に 100 年の躍進を支えるチームを作り上げ、ホッケー界に人材を輩出していただきますよう望んでやみません。

結びにあたり、早稲田大学ホッケー部の今後ますますのご隆盛を心からお祈り申し上げます。

早稲田大学ホッケー部創設百周年に寄せて

三田ホッケークラブ会長
松本　光弘

早稲田大学ホッケー創設百周年の節目をお迎えするにあたり心よりお祝い申し上げます。また日頃よりひとかたならぬご協力を賜り深く感謝いたします。大正、昭和、平成、令和とスティックでボールを繋いで今日までこられました、この間、恐慌、戦争、食糧難、学園危機、コロナ禍と時代の荒波を乗り越えて今日に至りましたことに、早稲田大学・稲門クラブの皆さま方に深く敬意を表します。

西暦では 100 年を世紀（センチュリー）と表し、時代の節目をターンエージ（Turn Age）と言っています。19～20 世紀の変り目は「ガス灯から電気灯に変わった時代」、20～21 世紀では「アナログからデジタルに変化した時代」と言われています。それでは日本のホッケー界では、私ども塾が 100 周年を迎えた、2006 年は「クレー・天然芝から人工芝に変わった」時代ではなかったでしょうか。そして貴校が迎えた 2022 年は「ホッケー界が躍動の時代に入った」と言われれば良いと期待しています。オリンピックにより、首都・東京に待望の国際試合を行うことが出来る、2 面のホッケー競技場が完成し、この活用により、関東リーグ・高校選抜・インカレ・マスターズワールドカップ、そしてワールドカップ（誘致予定）等の国内外のレベルの高い試合が行われ、大勢の観衆のもとで力のこもった熱戦が繰り広げられ、ホッケー界が発展することを望みます。

両校の創設者である、大隈老公と福沢先生は、お会いする前までは、「お高く留まっている学者」、「生意気な政治家」、などとお互い思っていたようでしたが、ある機会にはじめてお会いしましたら、意気投合しすっかり打ち解けて、家を往き来し家族ぐるみのおつきあいになるほど親密な関係になられたそうです。ところが明治 14 年の薩長藩閥による政変で、ご両者の一派は政府から一掃されました。この事により翌年には、老公は東京専門学校（今日の早稲田大学）、先生は時事新報社を設立されました。早稲田と慶応義塾はスポーツにおいても良きライバルとして熱戦を繰り広げて参りました。両校は成立ちも気風も違いますが、なにか互いに親近感・安心感がありますのも、創設者お二人の関係にあるのではないかと思います。

福沢先生は「伝統は守るべからず創るべし」とのお言葉を遺しておられます。百年の重みは大変貴重なものですが、この伝統に甘んじることなく、新たな時代を切り拓き、輝かしく発展をされることをお祈り申し上げます。

ホッケー部の歴史

1. 創設の経緯（創部 40 周年記念誌「東伏見」より転載）

早稲田大学スケートホッケー部創立当時の裏話　吉田兵吉（1923 年卒）

大正 11 年（1922 年）正月私は冬休みを利用して名古屋方面に旅行しておりました。大隈総長が逝去され、しばらく休講が続くという新聞を見たので、それでは川合修二君が下諏訪温泉の桔梗屋旅館に滞在中の筈だから同君を訪ね、かたがたスケートでもやってと、急に予定を変更して、今思うと頗る呑気な考えで下諏訪駅へ下車しました。此の旅程変更が後に私をしてスケートホッケー部創立の動機となるとは思いもよらないことでありました。川合君は府立四中から私の中学に転校してきた男（後フランス留学、美術工芸の道に進み今尚交際を続けている）で其の時以来中学時代は勿論卒業後も親しくつきあっていたものです。彼の転校の理由は図画の点数が落第点であったからだということであります。若し彼の絵が落第点をつけられず、従って彼が転校を決意しなかったなら、私と川合君、そしてスケートホッケー部との関係もおよそ無縁のものであったことでしょう。（略）

とにかくそれからすっかり意気投合して話し合っているうち、早稲田スケート倶楽部を創ろうではないかということになり、その実現は此の秋と話が決まった。

いよいよ秋になって具体化する為、先ず先輩で時の三越広告部長松宮三郎氏を訪ね相談すると同氏と下諏訪桔梗屋旅館主人（此の時は既に故人）とは同窓であるという関係もあって大賛成、然も大変な熱の入れようで倶楽部実現にはどうするかという問題打合せの為、柳沢君と私は東京会館へ招かれ御馳走になったのを今でも忘れません。柳沢君が諏訪中学同窓の小口孫六君を同志に加えて三人でやろうというので、何番教室であったか忘れましたが、お昼に会合したのをよく覚えております。倶楽部会長を誰にするかということが大事なことで、又当時としてはなかなか困難なことでした。結局喜多壮一郎先生（1917 年卒）にお願いしろと松宮氏の助言で、柳沢、小口、私の三人で恩賜館の研究室に先生を訪ねました。お断りすると云われるのではないかと心配しながら階段の所でお願いしてみたところ、外遊から帰って来られたばかりの先生は、あちこちで目のあたりにアイスホッケーの試合など見て、新しいスポーツにかなり理解しておられ承諾を得ることが出来ました。これで漸く倶楽部創立具体化へと一歩前進することになります。私が木造の古い集会所へ倶楽部員募集のポスターをはったのはそれから間もなくの 11 月に入ってからの事と記憶しております。名文句を考え又宿舎なども〇〇ホテルとかいった工合にはったりで書いたものです。一方柳沢君は宿舎の交渉を受持ち、なるべく安い所をと決めて呉れました。会員も 10 名位集り愈々大正 11 年（1922 年）12 月 25 日夜飯田橋発下諏訪へと出発しました。（略）

12 月 29 日頃喜多会長、岡本亀吉君、斎藤ジンバリスト、松本君等が到着して桔梗屋。これは中川旅館より上等な部屋に入り、一段と賑かになりました。滑るのが只もう何よりも面白く、昼は諏訪湖、夜は夜で下諏訪リンクで滑りました。(略)

当時スケートをやって居たのは学習院、東大、松本高校、それに日歯で、慶応などはやって居ても極めて少数の様でした。リレーでは失敗したが、直ぐその後下諏訪リンクでアイスホッケーの大会があり、これには優勝しました。慶応が此の時女子用スティックを持って来ていたのには今から考えると大笑いでした。

其の夜、中川旅館で宴会がありましたが、これが大変な騒ぎ。新宿へ下車した時は喜多会長はじめ全員二日酔でした。

冬のシーズンが終り、春頃戸山学校で用具等借用を許され、一緒にフィールドホッケーをやる様になり、アイスホッケーの予備運動にもなるので 1 週間に 1〜2 度戸山学校へ通うことになります。慶応のホッケー部がそれを伝え聞いて、早稲田もホッケーを始めた、それ早慶戦をやろうということになった様です。

三越の運動具売場に舶来のスティックが 10 本ばかりあり、これをうまく値切ったのはよいが、さて金がない。それで稲門堂のおばあさんに頼む話や、合宿の費用に足を出して困ったことや、こんなことを書いていると、色々懐しい人や、事柄が思い出されてきりがありません。

早大スケートホッケー部は、1923 年 7 月、信州富士見で初めてのホッケー合宿を行います。その際、1906 年にホッケー部を創部した慶応大学から中川新右衛門さん、三橋正さんが参加し熱心にコーチしてくれたそうです。それまで、慶応大学の試合相手は、現在の横浜球場の場所にあった YC & AC（Yokohama Country & Athletic Club）など外国人チーム、慶應義塾 OB が中心の東京ホッケークラブだけだったので、対抗戦のできる大学にホ

創設当時のメンバー

ッケーチームが育って欲しかったのだと思います。

諸先輩の指導を受けチーム力のついた早大は、10 月 31 日陸軍戸山学校グランドで、東京ホッケークラブと初めての対抗戦を行います。結果は経験の違いがものを言い 2-13 と大敗でした。11 月 11 日は慶応ホッケー大会に招待され、2 年前の 1921 年に創立した陸軍戸山学校と対戦、1-7 で敗戦しました。12 月には、陸軍戸山学校を、早大戸塚グランドに招き雪辱を期しますが 2-4 と勝てませんでしたが、点差は縮まり次第に実力をつけていきます。

その後、年末から年始にかけ、下諏訪の中川旅館などに 86 名が集まり、アイスホッケー合宿を行いました。合宿中に、最初の対抗アイスホッケー戦が、東京帝国大学、慶応大学、松本高等学校、早稲田大学の 4 チームで行われています。

そして、翌 1924 年 2 月、明治大学と初めての大学対抗戦を行い、3-1 で快勝しました。初勝利です。翌日の報知新聞に記念すべき試合の記事が載っています。

2. 体育会加入の経緯（創部 40 周年記念誌「東伏見 2」より転載）

体育会加入とその前後　田口 尚（1925 年卒）

大正 11 年（1922 年）10 月創立されたクラブが僅か 2 年後の大正 13 年（1923 年）10 月に体育会加入を認められたことはホッケー界の先駆者慶大ホッケークラブが陸軍戸山学校チームが出現するまで国内に相手校がなかった関係もあり、クラブ創立以来体育会加入にこぎつけるまで実に 14 年もかかったのに比べればまことに順調急速な生長というべきであります。

この成果は創生期を経た後の第 2 回諏訪スケート合宿の実績、その後のホッケー部門の活躍と実力によるものであります。そして体育会加入後まもなく行われた早慶対抗定期船の第 1 回が行われたのですから「体育会加入とその前後」が創立に次ぐ、歴史的な時期であったのであります。私もこの第 2 回諏訪合宿に参加しその後ホッケー部で数ヶ月間スティックを握って卒業したのですから在部期間は短かったのですが、ちょうどこの画期的時期に巡り会った訳であります。

（略）

水戸合宿を終りわれわれは秋の新学期を迎え登校しますと、俺等会のメンバーからア式（現在のサッカー）とバスケットボール（籠球）が体育会加入を希望している。加入許可は一つだけだから君の方もぼんやりしていると取り残されると聞かされました。わがクラブも前々から熱望していた問題なのに競争者が二つも現れては安閑としていられません。

早速われわれ委員は運動に着手することになりました。まず手続きを調べて見ますと各部部長代表委員から成る体育会総会で承認されることが必要であるとのことです。そこでわれわれは総会の前に下記実績を説明し予め各部部長代表委員の賛同を得ておき、その成果を総会に持ち込み喜多部長に最後の仕上げをして戴くという方針を立てました。各部代表委員からは「スケートホッケークラブの体育会加入に同意す」という小文書にサインして貰うことにしました。当時の状況としては何といっても難関は柔道部であろうと予想されておりました。

（1）2回に亘るスケート合宿で百名に近い部員を集めアイスホッケーは柳沢、小口等を擁し最強、これは中川、高橋等の強剛で覇を称えているスキー部に劣らぬこと。

（2）ホッケー部門では先進明大を破る実力を持っており、スケート部門共々光輝ある早大体育会のメンバーとして恥かしくないこと。

（3）スケート部門とホッケー部門とは沿革上不離の関係にあること。

各部を訪問して判ったことですが、スケートはスキーと共にウインタースポーツの双璧ですから皆知っておりましたし、ホッケーも前記早明戦が戸塚球場で行われたため学内のスポーツ関係者の多くはこれを観戦しその熱戦の面白さと部の実力とを認識しておったので部の承認を受けるのに非常な効果がありました。

委員のうちでも実際に承認運動をしたのは日数に余裕がなかった関係上、小口、千田、私等の少数の者が担当したのであります。従ってその間の事情を知っている者が少ないわけであります。

先ず部長説得ですが、私は計らずも三つの難関に遭いました。その第一は野球部の安部磯雄教授です。同氏は早大野球部長としてのみならず日本野球の父として有名だった人です。

スポーツに理解のある人ですから勿論直ちに賛成して戴けるものと思ったのですが意外にも君達の希望はよく判るが各部は現在経緯に悩んでいる。部が増へればそれだけ各部が苦しむことになり、「共倒れになる」（安部先生の言葉通り）といわれます。先生は一言も野球部の力を誇示されませんでしたが当時は体育会の経費の大半は野球部が負担していたのです。従って同部は一番強力な発言力を持っていたわけであります。私は先生の講義を予科時代国民科という時間で聴講したのですが、すこしダミ声でしたがよく通り、理路整然たる名講義として有名だったのです。引用される統計の古いこともご愛嬌として知られておりました。

先生は以前は幸徳秋水等とグループをなしておられましたが後に訣別され早大時代には公共事業の国営主義を唱えておられる程度でした。その先生が最も体育会で実力ある野球部長として我部の加入に反対されたのですからこれは困ったことになったと思いました。同行した千田君はこれはいかんと見切ったのか一言も発しません。しかしここで諦める訳

には行きませんので、同君と相談の上、私はその足で当時牛込矢来に住んでおられた飛田監督の自宅を訪ねました。同氏はまだ安部先生の意向を知らないので即時に賛成してくれました。

そして有田主将には自分が賛成したと伝いて同意を得なさいといってくれました。私はさらに勇躍有田主将に面会して賛成のサインを得たのであります。

次の訪問が私の元属していた競走部の部長山本忠興博士です。賛成の答を期待したのですが意外にもホッケーなんか何なんだといわんばかりの調子安部先生の様な反対理由もなくただ椅子に座ったまま一顧もせずといった態度でした。仕方がないのでそのまま引き退がり第三番目の訪問に移りました。素川というペンネームで政治評論家として有名だった水泳部長五来欣造教授です。同教授は海外に留学されたという経歴に似あわず常に和服で懐に本を入れて歩く 20 貫を越える文字通りの豪傑です。スケートは知っておられましたがホッケーは知りません。どんなスポーツかといわれるのでア式蹴球と似たルールで球を打つのと蹴るのとの違いであると説明にかかりますと「君その位の違いならア式と一緒にラ式蹴球部に入り仲良くやったらよいではないか、ア式もラ式も同じく蹴球だ」（五来先生の言葉通り）といわれたのには手がつけられず全く閉口しました。当時はラ式だけが体育会に加入していたのです。説明に大変な苦労を重ねて漸く曲りなりにも賛成を得たのであります。結局この三部長が難関だった次第でその他の部長には余り異論がありませんでした。

代表委員の方は俺等会々員の競走部細川君（山本部長と直接の交渉失敗にかんがみ私は引込み）に依頼してサインを取って貰いました。最初難関と推定していた剣道部も俺等会の海保君が同部の重鎮だったので早速サインを取って来てくれました。今一つの難関と目されていた柔道部は偶然私が同部の桜井弘之委員に希望を話したところ直ぐさまサインを持ってきてくれたのにはびっくりしました。漸くして二つの難関は意外に簡単に片付きましたので、ア式とバスケットをリードしたと感じ勇躍最後の仕上げにかかりました。水泳部は級友の弟西本竜三君（後水泳部主将）に尽力して貰いました。庭球部安部、ラ式吉田、スキー部中川主将等は自らサインしてくれました。漸くして体育会総会までにどうやら初期の目的を達することが出来たのであります。総会には喜多先生と小口君が出席しました。席上先生は得意の熱弁でクラブの実情を十分説明されたことはいうまでもありません。この結果学校か

喜多先生ご夫妻

ら受ける体育会費はこの際棚上げとして待望の承認を競争相手のア式、バスケットに先んじて獲得したのであります。

3. 大学対抗戦と第１回早慶戦

日本で最初の大学対抗戦は、1924 年 4 月 27 日、前年から活動を始めていた明治大学と陸軍戸山学校のグラウンドで行われました。結果は、早大が 5-1 で優勝しています。

５月４日には、５チームによる東都専門学校ホッケー競技リーグ戦が開催され、早大は日本歯科専門学校に 4-0、明治大学に 1-1、慶應義塾に 2-3、陸軍戸山学校に 3-6 と１勝２敗１分の３位でした。

スケートホッケー倶楽部は、これらの戦績と下諏訪合宿での実績が認められ、10 月、大学の体育会総会において、スケートホッケー部として体育会加入が承認されます。

第1回早慶定期戦両軍主将と審判

大学の正式組織となったホッケー部は、11 月 8 日から開催された第 2 回全日本選手権に参加し、東京帝国大学に 5-0、慶應義塾に 5-2 と決勝に進出、陸軍戸山学校に 0-1 で敗れたものの、初出場ながら準優勝という輝かしい成績を上げました。

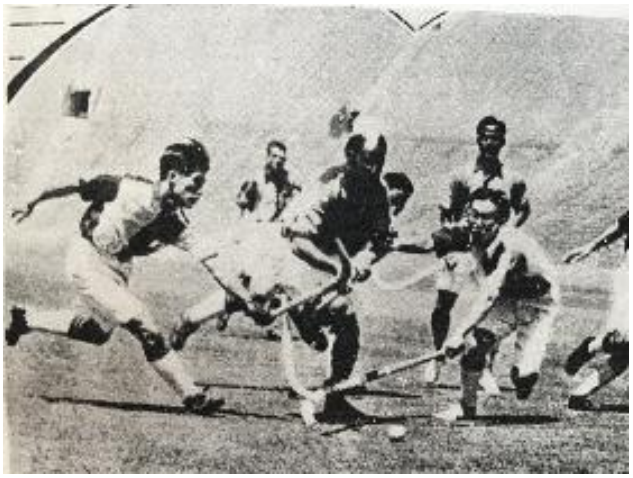
そして、11 月 18 日に、早大戸塚球場で第 1 回早慶ホッケー定期戦が開催されます。母校に慶應義塾を迎えいれた早稲田大学ですが、全日本選手権の屈辱から猛練習を重ねた慶應義塾に 2-5 で敗れ、準優勝となりました。

4. ロサンゼルスオリンピック銀メダル

1932 年ロサンゼルスオリンピックの選手団の活動については、1956 年にまとめられた「慶応義塾体育会ホッケー部五十周年記念誌」に日本代表チーム主将だった浅川増幸さんの手記に詳細に記載されています。それによると、選手団は 6 月 30 日に横浜埠頭を出港し、ホノルル、サンフランシスコを経由して 7 月 18 日にロサンゼルスに到着し、リトルトーキョーでのパレードなどの歓迎式典をなどとともに、芝生のグランドに馴染むための練習に励みました。

最初の試合は、8 月 4 日のインド戦で、LW に猪原さん、CF に小西さん、RW に今さん、LB に左右田さんが先発メンバーとして参加します。結果は 11-1 と大敗しましたが、チーム初の 1 点を上げました。

次のアメリカ戦と表彰式の様子は、浅川主将の手記によると次のとおりです。



日本対インド戦
（左が猪原さん、右が左右田さん）

「ブリーオフの球は直ちに日本がキープした。勢いだったメンバーの面上にはようやくこの頃から多少安心感の様子が見え、調子のよいすべり出しでグングン米国ゴールを圧した。六分、小西のゴールで先ず一点の先取、以後連続得点を挙げるかに見えたが、オフサイドの反則に機会を逸した。そのご、猪原がゴールして更に一点、ペナルティ・ブリーがあったが小西が逸した。しかしその後小西の一点及びハーフタイム直前のゴール直前のペナルティ・ブリーを今度は永田が出てスコアして四対〇のリードに前半を終わる。後半は四点リードに十分の自信を得、きわめて調のったフォーメーションで殆んど球を自チームのものにし勝利街道をひた走り、小西、猪原によって五点を加えた。これに対して米国の奮起は彼等にしては貴重な二点を挙げ、九対二で試合を終った。」

「この試合（インド・アメリカ戦）が終わるとオリンピック・セレモニーが直ちに開かれた。戦終ったフィールドの中央スタンド前に置かれた三段の段上、中央には第一位の栄冠を占めたインド主将ラルシャー、右に第二位の日本主将浅川、左に米国主将グリーアが立ち、米国とインドは戦い終えたばかりのユニフォーム姿で、日本は恩賜のブレザーコート正装で整立するや、先ず第一位のインド国歌が吹奏されオリンピック塔上に同国旗が掲揚され、次で満場起立のうちに君ガ代が高鳴り日章旗が塔の右側マストに静かに掲げられハタハタと翻がえる。時に四時五分、南加州の陽光は白地に赤の日章旗に映え、選手一同今更に仰ぎ見て勝利に胸一杯の感激にしばし陶酔した。かくて第二位の表彰状と銀の賞牌が授与され式を閉じた。」

ロサンゼルスオリンピック銀メダル
（猪原さんのご遺族から早稲田大学にご寄贈いただいたもの）

5. 女子部の創設

早稲田大学ホッケー部に女子部が創設されたのは 1991 年です。当初は正式な部ではなく、ホッケーをやってみたい学生が集まった同好会の形で発足しています。

1970 年代の関東では、筑波大学、成城大学、東京女子大学、津田塾大学、武蔵大学などが関東大学女子リーグを組織し対抗戦を行っていました。そのグループに、1988 年以降、多くの大学で女子ホッケー部が発足し、チームが増加していきました。

早稲田大学女子ホッケー部発足のきっかけは大学の体育授業のホッケー実技の授業に参加する熱心な女子学生でした。当時の体育授業は、早稲田大学ホッケー部監督だった佐野二郎さん（1964 年卒）が実技指導を行っていました。授業を受講する女子学生は 20 名超えることもあり、授業終了後も自主的にホッケーを続けるなど、ホッケーに強い関心を示していました。そこで、佐野さんの提案でまずはホッケーサークルとして活動を始めることにします。指導は佐野さんを中心に、当時の男子部員や早大大学院生であった久我晃広さん（1993 年卒）がコーチとして実技指導に当たりました。当時は、部員全員が未経験者なので、戦績については言うに及ばず、まずは何とかホッケーの試合ができるレベルを目標に練習を行なっていました。公式戦は、1992 年秋季リーグ戦からです。

1993 年には、体育局の正式な部に昇格します。初代の監督は佐野さんです。春季、秋季のリーグ戦の後の 11 月 21 日、慶応大学日吉グランド初めて早慶ホッケー女子定期戦を行います。早大ホッケー部女子チームは、1990 年に創部した先輩格の慶応ホッケー部女子部に挑み、0-3 で準優勝でした。

1997 年からは早川憲雄さん（1971 年卒）が監督として就任、1999 年からは錦織拓さん（1994 年卒）がコーチとして合流し強化が図られ、2 部リーグから 1 部リーグへと昇格を果たします。

そして、2009 年の東日本学生ホッケー選手権で優勝し、念願の初タイトルを手に入れました。2011 年にも同大会で優勝し、関東の強豪チームの一つにまで成長しています。

女子部創設当時、旧東伏見グランド

女子部公式戦に参加、中央は久我コーチ

インタビューと寄稿

1. 戦前のホッケー部　　佐藤守さん（1941 年卒）インタビュー

1917 年生まれの佐藤守さんは、1935 年に早稲田第一高等学院に入学と同時にホッケー部に入部、1941 年大学卒業までの早稲田ホッケー部在学中に、1936 年の全日本選手権優勝、及び 1940 年の全国高専ホッケー大会を経験され、輝かしい早稲田ホッケー部の歴史を築かれた。

2015 年 1 月 31 日、98 歳になられた佐藤守さんのご自宅にお伺いし、戦前当時の写真、新聞記事、記念品などを拝見するとともに、戦前の早稲田ホッケー部の思い出をお伺いした。

- 1935 年早稲田第一高等学院に入学したクラスであるＩ組（フランス語クラス）に当時の大学ホッケー部の横山憲造さん（1937 年卒）が勧誘にこられ、クラスのうち 20 名が東伏見のグランドに見学に行き、そのうち佐藤さんを含め第一高等学院Ｉ組より 7 名（岩崎新太郎さん、浅間俊雄さん、谷尾通造さん、市川鉄太郎さん、丸山多聞さん、今田公登さん、1941 年卒）がホッケー部に入部した。第一高等学院Ｉ組から入ったホッケー部員は全員商学部に進学し、この頃の仲間を中心に、定期的に会合を持ち、卒業後も長くに親しく付き合った。また同期には、台湾一中でホッケー経験のあった河合喜三さんが第二高等学院におられた。
- 当時は、陸上ホッケーは、スケートホッケー部の一部門として、アイスホッケー、スピードスケート、フィギュアスケートとともに活動を行っており、左右田秋男さん（1933 年卒）のようにホッケー部の一部の選手もアイスホッケーの活動も兼任する者もいた。当時の早稲田ホッケー部の構成部員は、早稲田大学、早稲田第一高等学院、早稲田第二高等学院、早稲田大学専門部が一体となって共同で練習を行っていた。
- 佐藤さんの初めて参加した静岡県大宮町（現富士宮市の一部）で行われた春季合宿の思い出は、とても辛く、歩くのもままならないほど厳しいものであったとのこと。

1936 年 6 月には、名古屋商業、神戸商大への遠征を行った。当時の名古屋商業との試合を報道した新聞記事にはホッケーを野外打球戦として、掲載している。

11.6.12.

早高、名商
3—3
引分け
野外打球戦

早稲田高等學院対名古屋商業の野外打球試合は十一日名商グラウンドで行はれ三點三で引分けとなる

早　高 3（1 2 — 1 2）3 名　商

開始3時50分、高野、柳田、木丸両氏

高野 稲葉大 竹内 富山 岸右 (早名) FW
HB
FB
GK 2 8 0
LC H PC F P 2 7 2
黒木 小滝 桑部 黒川 森山 藤 渡辺 大河 川

【概評】前半名商優勢に押し出し早高の出鼻をくじいて10分、右翼二十五ヤードから、ゴール前に迫り義のパスを木合らけてドリブルプッシュで一点先取、一進一退後早高の調子が出て30分、十ヤードの混戦を縫ける岩崎のパスを柳村巧みにプッシュして一点をかへす

▼三度中堂活気を呈してスピーデーな競り合ひをした後11分名商右翼二十ヤードから小出のパスを黒川らけてドリブルシュートで一点、21分ゴール前にもみ合つて成瀬シュートして一点、これに對し早高もねばつて28分竹石の好パスを浅間渡辺にシュートすれば中央を割つて一点、更に二十ヤードから浅間ドリブルシュートで危く一点をかへしてタイムアップとなつた

▼…早高が極の守勢で連絡をかいてゐるのに乘じて名商の側撃がめざましく活躍したことはその中堅、ゴールキーパーの未熟が原因を為せしめたことに反して光つてゐたといふべきであつた

【T生】

学院-名古屋商業戦の新聞記事（1936年6月12日付）

また当時の名古屋商業の FW として出場した桑山選手は、その後早稲田大学に入学した（桑山喜作さん、1942 年卒）。

第二次世界大戦の影は、暗く広がり、1941 年 12 月 8 日に日本は、アメリカ合衆国に宣戦布告し、佐藤さんは、1942 年 1 月 8 日に陸軍に召集され、その後中国の広東に出征され、1946 年 5 月に帰国されるまで、中国にて従軍をされていた、また、8 名の同期のうち、丸山多聞さんは戦死された。

佐藤さんは、京都府福知山のご出身で、戦前の写真や資料を京都のご実家で保管されておられたことに加えて、佐藤さんが 70 年以上前の資料をきちんと管理されておられるおかげで、今回貴重な資料を拝見することができたことは、特筆すべきことである。百周年記念誌の準備のために、佐藤さんは、98 歳の年齢にもかかわらず、理路整然話され、当時の記憶も大変鮮明であられ、我々の細かな質問にも丁寧にかつ正確にお答えいただことに、深く感謝をしたい。

1941年卒業生

1941年スケートホッケー部予餞会

2. 戦後の復興　　阿左美利男さん（1951 年卒）インタビュー

1927 年生まれの阿左美利男さんは、1951 年卒業され、稲門ホッケークラブの会長を 1986 年より 1999 年まで務められた。2015 年 6 月 27 日に阿左美さんとお会いし、終戦直後の 1945 年から卒業された 1951 年当時のホッケー部の思い出をお伺いした。なお、阿左美さんは、2021 年 7 月 20 日にご逝去されました。ご冥福をお祈りします。

阿左美さんは 1945 年 3 月に早稲田実業を卒業され、4 月に早稲田第二高等学院に入学されましたが、戦時下であるため、第二高等学院に入学後の 6 月までは、早稲田実業の学徒勤労動員として、現在の NTT 武蔵野研究開発センター付近にあり零戦のエンジンを製作していた中島飛行機多摩製作所に東伏見駅から通われていた。当時、人工芝になる前のホッケーグランドのそばにあった早大の学生寮や東ハトの工場があった高台の横斜面に、米軍の空襲を防ぐ防空壕として横穴が掘られていた。その防空壕を掘った残土は、ホッケーグランドに山積みにされていた。

終戦前に一時秩父の親戚宅に疎開していた阿左美さんは、終戦直後の 9 月上旬に陸軍のトラックに便乗して上京されました。早くも 1945 年 9 月下旬に第二高等学院は授業の再開が発表され、10 月上旬には授業が正式に開始された。授業が開始された際に学校が指定した阿左美さんの席のとなりの学生が静岡県見附中学出身の高橋善治さん（1951 年卒）であった。高橋さんのお兄様は慶応のホッケー部で既に活躍されており、全日本の選手としてアジア大会にも出場した名選手であった。

早実中出身で早大の様子をよく知る阿左美さんに対して、高橋さんがお兄さんの勧めで、早大のホッケー部に入部を希望し、ホッケー部を探していたことがきっかけで、ホッケーのことを知らなかった阿左美さんが、当時の早大の体育館に高橋さんを連れて、ホッケー部を一緒に探しに行った。何人かの学生に聞いてもホッケー部のことを知る大学生がいなかったが、たまたま卓球部の大学生がホッケー部と部室を共有しているというので、そこを尋ねると当時の大学のキャプテンの深田次男さん（1947 年卒）とマネージャーの小川謙二郎さん（1947 年卒）がおられ、高橋さんの入部が許されたと同時に、付き添いとして同行した阿左美さんもその場で勧誘されホッケー部に入部することになった。高橋さんと阿左美さんは第二高等学院、大学時代とホッケー部で活躍され、卒業後も長く交友を育まれることになった。

阿左美さんが第二高等学院生当時のホッケー部は、大学生だけではメンバーが足りず、高等学院の生徒を加えないとチームの編成できなかった。またホッケーグランドは上述のとおり、防空壕の残土が残り、競走部のトラックの内側の部分を使って練習をしていた。ホッケーグランドは、高畠誠二さん（1937 年卒）の指導により、1946 年に当時の部員の手作業でグランドの残土を処理し、グランドを使用できるように整備を行った。

➢ 東伏見のホッケー部とサッカー部の風呂場

1952 年に稲天寮ができる以前、東伏見にホッケー部の部室がサッカー部の部室と棟続き（以前のグリーンハウスのあった場所）であり、部室の間に両部が使う風呂場があった。当時は、10 人以上は入れる巨大な風呂おけが 2 つあり、1 つがホッケー部専用、他方がサッカー部専用だったが、洗い場は共通であった。またホッケー部の風呂おけは、サッカー部側にあり、サッカー部の風呂おけは、ホッケー部側にあったため、入浴する際は、両部が入り乱れて、入浴をしていた。これは、両部が裸に付き合いで、交友を深めることができるようにとの配慮であった。

➢ 創設 30 年事業である稲天寮の建設

1952 年の創設 30 周年記念に向けて、廣瀬藤四郎さん（1929 年卒）発案で、創設 30 周年記念事業として、ホッケー部寮の建築を計画し、大学側に建設を陳情したが、大学による建築はかなわなかったが、建築予算をホッケー部で負担するのなら寮建築が可能ということであった。広瀬さんの多大な尽力により、山本義樹さん（1929 年卒）がおられた銭高組の施工により稲天寮が建築された。

➢ 創設 40 周年記念事業

1962 年、早稲田大学ホッケー部稲門会会員の慰霊を目的に行われる。また、終戦直後に合宿所としてお世話になった浅間温泉玉の湯に集まって、大騒ぎしたということである。

➢ ホッケー部のグランド

東伏見に早稲田大学のグランドができたのは、早大プールが完成した 1936 年頃である。阿左美さんが平井さん（1930 年卒）他から聞いた話では、東伏見グランドができるまでは、ホッケー部の練習は大学近くの戸山学校や、東京府が大正時代に今の江東区の海を埋め立てて造成した洲崎グランドを利用していた。大学から洲崎グランドへは都電 1 本、7 銭で行けたという話である。

戦時中、今の武蔵野市にあった中島飛行機の工場への爆撃に備えて、旧ホッケーグランド（現馬術部）の南側の川沿いの崖に防空壕が 5 本作られたが、その掘り出した土がホッケーグランドに山積みになっており、終戦後のホッケー部の活動再開時にはグランドはまったく使えない状態であった。そこで、高畠監督指揮のもと、学生達が土木作業をやってグランドの残土をならした。その際、東伏見の土は関東ローム層で水はけが悪いため、水はけをよくするために、当時十条製紙勤務の正村篤二さん（1937 年卒）が、工場で廃棄された石炭ガラをトラックで運んできてグランドにまいたということである。このように苦労して整備した東伏見ホッケーグランドは、1947 年ごろから使えるようになり、1948 年には完全に復活した。

3. ローマオリンピックの想い出　　中山弘さん（1957 年卒）インタビュー

2015 年 11 月 3 日、1957 年卒の中山弘さんのご自宅にお伺いし、中山さんに当時のホッケー部の思い出をお聞きした。

中山さんは、1950 年新制早稲田大学高等学院に入学された。新制高校の第二期生であられる。1951 年春、中山さんが高校 2 年生のとき、ホッケー部の OB である高畠誠二さん（1927 年卒）の働き掛けで、高等学院にホッケー部が創部された。当時大学生であった対馬精一郎さん（1954 年卒）が中心になり、当時高校 2 年生であった小河内裕さん（1957 年卒）がホッケー部の勧誘を行っておられた。当時、東京では、学習院と成城しか行っていなかったホッケーであれば、その年広島で行われる国民体育大会に行けるという誘いに乗って、中山さんはホッケー部に入部された。1957 年の卒業生の多くは、当時高等学院でホッケーをはじめ、大学でも続けた（佐藤健次さん、渡辺博さん、浅見二男さん、吉田正礼さん、斎藤淳さん、村瀬健さん、小河内裕さん）。当時はスティックなどの道具も十分ではなく、部室にあった先輩が使っていた折れたスティックの残骸などをつなぎ合わせて使っていた。また、大学ホッケー部は部員不足に悩み、それを解消すべく高畠さんが中心になり高等学院にホッケー部を創部に尽力をされたことが、その後の早稲田大学ホッケー部の礎を築くこととなった。

創部したての高等学院ホッケー部は、猛練習を重ね、創部した 1951 年の秋には、見事東京代表として、広島国体に出場をはたした。高等学院としても初めての国体出場ということで学校をあげて応援してもらったが、さすがに初出場の広島国体では、健闘むなしく 1 回戦で敗退した。その後も、高等学院は猛練習を重ね、翌年の 1952 年福島国体に東京代表として出場し、見事決勝まで勝ち進み、向陽高校に次ぎ、準優勝を成し遂げられた。国体での準優勝の快挙のあと、高等学院ホッケー部の部員も増加し、その後、大学のホッケー部も高等学院出身の部員が入部し、部員が増加した。

中山さんが高等学院時代の東伏見のグランドは水はけが悪く、学院生は練習を終えると、近所の銭湯（通称山風呂）まで行き、燃えカスのコークス（石炭ガラ）を分けてもらい、リヤカーでグランドまで運び、それをグランドにまいて、石のローラーを使いグランドの水はけをよくするよう整備をさせられたことは、つらい作業の思い出であった。

中山さんが高等学院在学中に、高校のホッケー早慶戦が開始された。

中山さんが大学に入学された 1953 年に行われた第 2 回全日本学生選手権において早稲田大学は決勝戦に勝ち進み、当時黄金時代を謳歌していた明治大学と優勝を争ったが、残念ながら 0-4 と敗北したが、見事準優勝を飾った。当時のインカレは世間の注目度も高く、多くの新聞社が取材し、大きな記事として取り上げられた。

中山さんは横浜の自宅から東伏見のグランドまで通っていたが、その当時の西武線はまだのどかな時代で、練習後は東伏見から高田馬場まで、座席をベッド代わりに横になって眠っ

て帰っていた。ちなみに、当時稲天寮に住んでいたのは、島村正雄さん（1956 年卒）と富島勇さん（1957 年卒）だけで、他は学院出身で自宅から通っていた。

中山さんが現役の時代は、関西学院との早関ホッケー定期戦が行われており、1955 年の早関ホッケー定期戦は、当時の西宮球場において、ナイターで行われた。残念なことに、その後、早関ホッケー定期戦は競技レベルの差が大きすぎるという早稲田側の申し出により廃止された。

中山さんが現役当時芝生のグランドでホッケーの試合をすることはなかったが、一度当時の後楽園競輪場のバンクの内側の芝生のグランドで早慶戦が行われたことがあった。

中山さんは、1957 年に大学を卒業されると、稲門クラブでプレーを続けられ、また静岡国体には、東京代表チームの監督を務められた。1960 年には、見事、日本代表に招聘され、ローマオリンピックに参加された。またその代表チームには、コーチとして市川日出男さん（1940 年卒）と、早稲田大学 2 年生であった木原征治さん（1964 年卒）も招聘されていた。

ローマオリンピックの前年は、年間 4 回合宿し、オリンピックに備えた。芝生での試合に備えて日本で芝生のグランドで練習したが、三井か三菱の銀行の郊外のグランドだったと思う。海外チームと対戦をしたのは、ローマオリンピック参加のためローマに向かう途中、西ドイツに遠征し、ハンブルグで地元チームと国際試合を行ったのが初めてであった。中山さんは、その際に西ドイツの競技環境のすばらしさに感動されたという。西ドイツでは、ホッケーをする人は地元のスポーツクラブに参加し、そのスポーツクラブには、芝生のホッケーグランドがいくつもあるような素晴らしい環境でスポーツに親しんでいた。

ローマオリンピックでは、外国人チームとの体力の違いに唖然とされたという、例えば、当時の日本チームのスティックの重さは 15 オンスぐらいのものを使っていたが、外国人チームは 22 オンスのものを使っていた。残念なことに、ローマオリンピックでは、日本チームの成績は振るわず、1 回勝ったのみで 16 チーム中 14 位であったが、4 年後の東京オリンピックでの準備に役立つものであった。ローマオリンピックでは、当時の日本代表の監督は慶応大学 OB で、丸の内ホテルの五百木さんが務めておられ、ホッケーチームは閉会式までローマに滞在し、

ローマオリンピック日本代表チーム
前列左端 中山弘さん、左から5番目 市川日出男さん、後列左から4番目 木原征治さん

オリンピック終了後も、ナポリを観光したり、フランス、デンマークに遠征し、国際試合を行って帰国した。

1964 年の東京オリンピックでは、中山さんは、ホッケー施設担当として、駒沢球技場で、東京オリンピックのホッケー競技を支援された。

当時スティックは輸入物が中心で、当時銀座 1 丁目にあった日本体育で購入していた。ボールはコルクを白く塗ったものが中心ですぐ割れるようなものであった。1954 年ごろからプラスチックボールが登場した。オリンピックでは日の丸の入ったスティックを新調していった思い出がある。

4. 昭和 30 年代の想い出　　佐野二郎さん（1964 年卒）インタビュー

佐野二郎さん（1964 年卒業）は、早稲田大学男子ホッケー部監督、女子ホッケー部監督、稲門ホッケークラブ会長を歴任され、現在は稲門ホッケークラブ名誉会長であられる。2015 年 10 月 4 日に佐野さんとお会いし、当時のホッケー部の思い出をお伺いした。

佐野さんは、名古屋商業高校でホッケーに出会い、1960 年に早稲田大学に入学された。佐野さんの早稲田大学進学のきっかけは、当時名古屋で、ホッケー用品の販売を手がけておられ、佐野さんが従来親しくされていた市川日出男さん（1940 年卒）が、佐野さんに早稲田進学を強く勧められたからであった。市川さんは、1960 年に早稲田大学ホッケー部監督就任を決断され、またその 4 年後の 1964 年に開催が決定されていた東京オリンピックのホッケー競技支援の為に名古屋から上京することを決断されておられた。当時、市川さんは、日本人唯一のホッケーの国際審判であった。

佐野さんは入学され、稲天寮に入寮された。入学時のキャプテンは、4 年生部員が居らず、当時 3 年生猪原恭一さん（1962 年卒）であられた。当時は部員の過半は学院出身者で、寮生は木原征治さん（1964 年卒）と佐野さんの 2 名だけであったが、市川監督とそのご家族も当時、稲天寮に住んでおられた。その後、1963 年には、寮生も増えたため、道路側の部分を増築し市川監督とそのご家族は、増築された建物にすまわれた。

1963年インカレ準優勝チーム
前列右端 佐野二郎さん

当時では珍しい電話が当時稲天寮に設置されていたのは、市川監督が稲

天寮に引っ越される以前は、大学のグランド管理人である菊池さんという年配の御夫妻が稲天寮に居住されていたので、大学側が電話を稲天寮に設置したことが理由であった。

当時は、餃子ハウスと呼ばれていた（後に、十八番、あるいは久保商店と呼ばれていた）店では、朝から夜まで営業し、パンや飲み物だけでなく、ラーメンや餃子なども、早稲田の学生にはツケで飲食をさせていた。また、佐野さんが現役の時、寮の近所にあった「小鳥や」というパン、菓子、飲み物などを深夜まで売っている店のおばさんの紹介で、稲天寮に賄いの女性が朝食、夕食を作っていたことがあったが、あまり評判も良くなく、短期間で賄いもなくなったということだった。その当時の佐野さんの食生活は、朝食として餃子ハウスで 30 円のパンと牛乳を買い、夜は三晃庵や、武蔵関などに出かけて夕食をとっていた。その当時、東京オリンピックに向けての合宿が頻繁に検見川で行われていたが、その合宿での食事は充実しており、佐野さんはその合宿に参加されるたびに、体重が増えて帰ってこられたという。佐野さんが 1 年生の時に、高畠誠二さん（1937 年卒）に、三晃庵でご馳走になった際に焼酎をたくさん飲まされ、その後 2 日間起き上がれないほどの二日酔いに苦しんだという。

佐野さんが 1 年生の 1960 年夏合宿は、広島で行われた。市川監督は、ローマオリンピックに出かけておられて、夏合宿は、広島在住の卒業生が支援をし、当時高校ホッケーの強豪校である、山陽高校と合同練習を行った。当時の山陽高校と練習試合をしても、互角の戦績しか残すことができず、木原一行さん（1954 年卒）に強く叱責されたことを佐野さんは強く印象に残っておられるとのことだった。合宿中は、田中義郎さん（1954 年卒）がスクターで併走されたランニングで街中を走り、そのことで広島県物を済ましてしまったが、とてもきつい市内見物だったと佐野さんは、仰っておられた。

佐野さんが 1 年生の 1960 年当時は、大学チームの人数が不足しており、全日本選手権には卒業生を加えたチームを編成し、全早稲田として参加をした。3 回戦で在日韓国に 2-1 で敗れたが、在日韓国チームには、そののちの天理大学の監督で活躍された恩田選手が参加していた。

1956 年の関東学生秋季リーグでは、6 チーム中 5 位であったが、4 位になった東京大学に敗戦し、OB の方にこってりと絞られた。

佐野さんが現役時代は、関東では、明治大学、法政大学が強い時代であった。特に明治大学には、1962 年の全日本学生選手権決勝、1963 年全日本選手権決勝、あるいは 1961 年全日本学生選手権準決勝、1962 年全日本選手権準決勝と 4 回も苦杯をなめている。1962 年の全日本学生選手権は、例年 11 月に行われていた大会が真夏の 7 月に、富山県石動〈現小矢部市〉で行われ、その猛烈な暑さの中でも市川監督得意の試合当日の早朝練習を行い試合に臨んだ。準決勝は 1-0 で法政大学に勝利し、決勝の相手は、上述の通り全日本代表を数名そろえる強豪の明治大学であった。前半早稲田は 1 点失い、後半に反撃をかけたが残念ながら追いつくことができず悔しい敗戦となった。当時は水を飲みすぎるとバテるからと抑え、代

わりに塩をなめて試合に臨んだ。翌年もまたしても 1 点差で明治に苦杯をなめた。但し、早稲田は着実に力をつけていった。

佐野さんは、1964 年全日本選手権では全早大のメンバーとして、4-1 で全慶大を破り、見事優勝を成し遂げられた。この大会以降全日本選手権 4 連覇を成し遂げた。OB で出場したのは、木原征治さん（1964 年卒）寺本崇さん（1964 年卒）と佐野さんであった。

1964 年東京オリンピックの代表チームには、早稲田大学から、木原征治さん（1964 年卒）橋本征治さん（1966 年卒）吉村実さん（1967 年卒）の 3 名が招聘された。

佐野さんは、卒業後、各大学の卒業生で東京在住の有志で構成された東京プロパーズで、競技を続けられた。

5. 幻のミュンヘンオリンピック　　和田明仁さん（1969 年卒）インタビュー

稲門会会長であり、1972 年ミュンヘンオリンピック日本代表ホッケーチームキャプテンを務められていた和田明仁さんに、当時の思い出をお伺いしました。

➢ オリンピックへのあこがれ

和田さんは、1962 年早大高等学院に入学し、先輩の勧めもあり当時国体に出場できる運動部という売り文句のホッケー部に入部された。

1965 年、和田さんが早大に進学されると、早くも 1 年生から、全日本代表選手に召集され、年間 10 週間以上に及ぶ代表合宿、遠征に参加し、市川日出男日本代表チーム監督（1940 年卒）のもと、1968 年のメキシコオリンピックを目指した。

➢ メキシコオリンピック

1964 年東京オリンピック大会 6 位であった日本代表チームは、1968 年メキシコ大会にも出場、稲門からも市川監督以下、吉村実さん、和田さん、大塚智万さん（1967 年卒）が出場した。

結果は、16 か国中 13 位であったが、予選リーグ最終戦、日本は、予選リーグ第一位のインド（銅メダル）と後半 20 分まで（当時 35 分ハーフ制）、0-0 の接戦を演じていたが、不当なジャッジで日本の反則を取られ、ペナルティストロークがインドに与えられたことに対し、市川監督は、この不当なジャッジへの抗議の意味と興奮した選手を鎮めるために、一旦選手をベンチに引き上げさせた。

しかし、審判団は、この行為を試合放棄とみなして、この試合を 0-5 でインドの勝利とする判定を下した。

➢ ミュンヘンオリンピック出場決定

メキシコオリンピック終了後、次の 1972 年ミュンヘンオリンピックを目指して、日本代表チームは大幅に若返りを行い、和田さんが、その日本代表チームのキャプテンに就任された。和田さんをキャプテンとする新代表チームが結成されて最初の国際試合である、香港で行われた香港トーナメントで韓国に大勝し優勝した。和田さんは、この国際試合で、新チームが大きな自信をもつことができたと感じられたという。

1970 年 12 月、ミュンヘンオリンピックのアジアの出場権 3 枠を決定するアジア大会が、バンコクで開かれた。このアジア大会直前に、日本代表チームは、1 か月間のオーストラリア遠征をおこなった。和田さんは、この遠征では、苦しい試合ばかりであったが、その苦しい試合を経て、日本代表チームは、そのチームワークを強化、醸成して、アジア大会へ臨むことができたと、当時を振り返られた。

アジアには当時の強豪国、パキスタン（メキシコ金、ミュンヘン銀)、インド（メキシコ、ミュンヘン、共に銅）がおり、残り一枠を、マレーシアと日本が 3 位決定戦で、争った。0-0 で迎えた後半 12 分（ハーフ 35 分制）に、ついに和田さんが、相手ゴールを奪い、1-0 で、日本が勝利、ついに、ミュンヘンオリンピックの出場権を獲得した。

このマレーシア戦には、稲門より和田さん、大塚さん、雨宮三郎さん（1969 年卒)、古田俊次さん（1970 年卒)、藤井正二さん（1973 年卒）が出場されている。

➢ 幻のミュンヘンオリンピック

日本チームは 1970 年 12 月のアジア大会で 3 位となり、ミュンヘンオリンピック出場を決めたが、1971 年 1 月に、国際オリンピック委員会より、日本オリンピック委員会に、1971 年 12 月までに行われてなくてはならない日本代表ホッケーチームのミュンヘンオリンピック参加登録が完了していないとの連絡が入った。調べてみると、日本オリンピック協会内での手続きミスにより、出場登録がなされていないことが判明、日本代表ホッケーチームの出場登録は、認められず、最終的に、マレーシアが、日本に替わり、出場した。（マレーシアは、16 か国中 8 位)。

今から考えると、当時の登録漏れの事態に対しても、適切な対応、処置を行えば、このような最悪の結果を防ぐことができたのではないかと思えるが、やはり当時の日本は、現在と違い、海外においての経験や交渉力が乏しく、そういった対応もできなかったのが現実だったのであろう。

➢ 2021 年東京オリンピック、これからの日本ホッケー

和田さんは、自分を成長させてくれたホッケー界への感謝の気持ちとホッケーへの熱い情熱のもと、1990~1992 年には早大監督に就任、2014 年稲門ホッケー倶楽部会長就任、

また 2017 年東京ホッケー協会会長に就任され、現在、日本ホッケー界に多大な貢献をされておられる。和田さんは、次のように言われてインタビューを終えた。

日本代表ホッケー男子チームは、2018 年のアジア大会では、女子チームとともに金メダルを獲得、そして、1968 年メキシコオリンピック以来、54 年ぶりに、2021 年の東京オリンピック出場し、ようやく、日本ホッケー界が呪縛されていたミュンヘンの呪いを解くことができたと思う。そして、2023 年、新たな日本ホッケーが世界に羽ばたくことを強く確信している。

6. 全日本学生選手権優勝物語　　古田俊次さん（1970 年卒）インタビュー

早稲田大学ホッケー部（男子部）は、全日本学生ホッケー選手権（インカレ）では、1969 年の優勝を記録するのみである（準優勝は、1953 年、62 年、63 年、96 年の 4 回）。1969 年優勝チームの主将であった古田俊次さん（1970 年卒）に当時のお話を聞いた。（2023 年 1 月 6 日 葉山にてインタビュー）

➢ ホッケーとの出会い

古田さんは、1965 年に行われた第 20 回岐阜国体のホッケー会場となった岐阜西工業時代に、国体強化チームのメンバーとして、猛練習をし、国体で優勝、インターハイで準優勝と素晴らしい成績を収められた。古田さんの活躍に注目した当時の早稲田監督の市川さんの勧誘もあり、古田さんは、早稲田に進学された。

➢ 1969 年春季リーグの低迷

古田さんが入学された当時の早稲田ホッケーチームは、陣容も充実し、黄金時代ともいえる素晴らしいチームで、古田さんが 1 年生、2 年生の 1966 年、67 年に全日本ホッケー選手権で優勝したが、古田さんが 4 年生、主将となった 1969 年のチームは部員が 14 名、うち 4 名が理工学部で、なかなか十分な練習もできず、春のリーグ戦では、6 校中、5 位という成績であった。

➢ チームの立て直しと戦略

春季リーグを終えた古田主将は、低迷したチームを立て直すため、少ない部員の適性を見極めた戦略を考え、その戦略を実行するための練習プランを練ったという。

当時のホッケーのフォーメーションは、5 人のフォワードで構成されており、ライトインサイド（ＲＩ）を起点に攻撃の形を作ることが主流であった。早稲田は、5 人でなく、4 人フォワードとし、1 名を敵のＲＩのマーカーとして、攻撃の起点を抑える戦略をとった。この戦略は、少ない 4 人のフォワードで 5 人分の働きをしなくてはならず、このため

の走力の強化の練習を重点的に行った。また、市川哲夫さん（1973 年卒）が、重要なＲＩのマーカーの役目を果たされた。

攻撃面では、当時市川監督が欧州のホッケー戦略分析されており、その情報をもとに、早稲田が、日本では、初めて、ジャーマンコーナーをショートコーナーに取り入れ、古田さんがショートコーナーのヒッターとして、練習を積まれた。のちに、このショートコーナーが、インカレ優勝の大きな武器となった。また、部員が少なく紅白戦もできず、リーグ戦も 5 試合だけで、チームに試合経験が不足している点を克服するために、夏合宿では、立教大学と合同合宿を張り、午後は必ず練習試合を行い、試合経験を積んだ。

1969 年当時は、学生運動が活発で、早稲田でも、大学が休講となり、普段なかなか練習時間の取れない理工学部の学生も含めて、十分な練習時間が取れたこともチーム強化につながったという。

➢ 1969 年全日本学生ホッケー選手権（インカレ）

春季リーグの低迷後のチーム戦略の見直し、厳しい練習の成果もあり、秋季リーグでは、チーム力アップの手ごたえを感じていた古田主将率いる早稲田チームは、1969 年 11 月天理市で行われたインカレに出場、1 回戦（4-0 関学）2 回戦（4-0 東農大）準々決勝（4-0 関大）と順調に準決勝に進む。

準決勝の明治戦も 1 点を先制し、押し気味に試合を進めるが、終了間際に、明治のサークル外からのヒットを守備陣が流して、見送ったところ、ゴールと認定され、結局 1-1 で終了、試合結果は、両チーム 11 人の選手が各自、割り箸を引き、マークの付いた割り箸を多く引いたチームの勝利というくじ引きで行われ、早稲田が勝利をした。

➢ 全日本学生ホッケー選手権（インカレ）決勝戦

決勝戦は、1967 年 1968 年と連覇している天理大学と対戦、地元開催ということもあり、この決勝戦を天理教の教祖様が観戦され、観客も天理を応援し、完全にアウェイの試合であった。

試合は、前半古田さんのショートコーナーで早稲田が先制、その後 天理がペナルティストロークで 1-1 の同点に追いつく。後半古田さんのショートコーナーで 早稲田 2-1 リード、その後、早川さんの得点で 早稲田 3-1 と差を広げる。終了直前に、天理のフィールドゴールで 3-2 となるが、そのまま終了し、早稲田の勝利。

この試合で、早稲田は、2 本のショートコーナーを得たが、そのすべてを古田さんが、決め、2 得点された。

前評判の高い天理を破ることとは、古田さん自身も、早稲田チームも予想しておらず、優勝して受け取った優勝カップや盾などが、思いのほか多く、決勝戦当日に帰京する予定を延期して、奈良に一泊して、優勝の美酒を楽しまれたという。

あらためて、古田さんは当時を振り返って、部員が少ない、練習時間が限られているという制約は、他の年代のチームと共通の制約があったが、その制約、弱点を克服する戦略考え、その戦略を実行するために準備を一生懸命行ったことがインカレに優勝につながったと語っておられた。

このことは、今の早稲田ホッケーチームにも尊い教訓になるのではないだろうか。

7. 早稲田大学黄金期を語る　　宮本隆三（1968 年卒）

この度早稲田大学ホッケー部創設百周年記念を迎えるに当たり、100 年の戦績を辿れば小生が在学した 4 年間が最も長く強い「早稲田大学ホッケー部」の名声を博したと回想します。なぜここまで強かったのかを分析すれば、手前勝手になるが、ホッケーの名門「山陽高校ホッケー部」が国体・インターハイの全国優勝をした選手が毎年数名入学、加えていつも優勝決定戦を戦っていたライバル校選手が途切れずに入学し、高等学院ホッケー部経験者とのコミュニケーションが良くホッケー技術・技能・戦術・戦略が伝承された結果と思います。当時、明治大学ホッケー部の小林監督（当時日本代表監督）が名将として名を馳せておられたので早稲田大学ホッケー部は名古屋から市川日出男先輩を招聘して稲天寮に選手と一緒に住まわれ、ホッケー競技を指導されまた選手の発掘に努力されたのが大きな原因だといまだに思っている。市川監督は知将と言われホッケーの新しいスタイルを数多く考案（例: 5 人の FW を W 形フォーメーション）され、対戦相手の度肝を抜く戦術が巧を制して日本一に輝き、小林監督の後継者として日本ホッケー界の指導者のトップに君臨し日本代表監督に就任され早稲田から日本代表選手が数多く選出され、まさにこの時代が早稲田大学ホッケー部黄金時代と個人的に思っています。その後は敏腕恩田監督率いる天理大学ホッケー部の長期全盛期時代が続いて行きました。思うに学問においてもスポーツの世界においても、学校の方針と卒業生の強力なサポートがあって現役選手の活躍が具現化されます。

このバランスが保たれなければ、いくら大声を張り上げ「強い早稲田」を訴えても現在の様に全国の幼少からホッケーのエキスパートをゲットして日本一を取り学校の名声を高める、まったく違った価値観の時代になったと、67 歳からマスターズで 10 年間現役プレーヤーして他校の状況把握し認識している現状だと内心あきらめの境地です。こんな時代が早稲田大学ホッケー部にもあったことを記録に残せるだけで意義があると信じて書き留めた。

感謝

※　　名将・知将・敏腕は個人的見解の名称です。

8. 関西支部の活動　　井上栄之助（1976 年卒）

早稲田大学ホッケー部創設百周年を迎えられ誠におめでとうございます。

百年の間には輝かしい歴史と存続が危ぶまれる程の危機もあったかと思います。しかし、ここに百周年を迎えられたことは、創設当時の諸先輩方をはじめ百年の間の大学、OB、現学生の関係各位の努力なくして成し得なかったと思います。

私が入学した 1972 年に 50 周年の記念式典が大隈会館で実施された事がつい昨日の様に思われ丁度半世紀の関わりを持たせていただく事に感慨深いものがあります。入部した前年は部員 10 人でスキー部の方に GK をお願いしたと聞き、我々新入部員 5 名で 11 人のメンバーが組めた状況でした。その後、学院からの入部が増え 4 年間インカレベスト 4、早慶戦 3 勝 1 敗、3 年生の時には全日本選手権で準優勝を勝ち取ることができたことが大きく印象に残っています。

1976 年に卒業し関西に戻った時、1954 年卒の真木恭二さんから関西早慶戦を行うので参加するように連絡があり今日まで関わりは続いています。当時の関西稲門ホッケークラブは、1937 年卒の森下通伯さんが会長をされており大阪早稲田クラブで総会があり季節の良い時期に 1 泊で慰安旅行に行く親睦会、関西早慶戦や早明戦並びに関大 OB とのゲームなど活発に活動が行われていました。当時を振り返るとお世話いただいていた 1947 年卒の深田次男さん 1949 年卒の渡辺三郎さんなどは 40 歳後半で仕事や家庭の事など忙しい頃だと思いますが会員のお世話を良くしていただいたと感謝しております。入会以前の事は詳しく分かりませんが、1927 年卒の黒田重助（第 1 回早慶戦のメンバー）さんが関西での OB で一番古い方と思われるので関西稲門ホッケークラブの基礎を築いていただいたかと思います。黒田さんは戦後京都ホッケー協会の会長をされており当時京大ホッケー部しか

なかった中 1948 年に大谷高校にホッケー部を作り 1951 年に立命館高校にホッケー部を作るにあたり尽力されたと聞いております。

私が入会以降、仕事の関係で関西に定住される方が少なく約 20 年お世話させていただいていますが、当時の先輩方は亡くなり私より先輩は 1959 年卒の柴田寿一さん（学院)、1968 年卒の山本忠さん（星光）の 2 名と把握しています。現在 23 名が名簿に載っていますが現在の社会環境では中々親睦会を実施する事が出来ません。百周年を期に次の百年に向け関西在住の若い人達にも呼びかけ OB 会の活動を活発に行うことで学生支援を行い「強い早稲田大学ホッケー部」の飛躍・発展に繋げて行ければと思います。

9. 稲天寮物語　　仁賀建夫（1982 年卒）

かつて、東伏見駅の南側の坂を下ったところに「稲天寮」というホッケー部の合宿所がありました。南向き斜面に長い廊下と 8 畳部屋 4 つ、6 畳部屋 2 つ、大きな厨房とトイレ、シャワーとバスタブのある木造平屋の大きな建物でした。

稲天寮は、地方出身の学生の生活の場であるとともに、練習前の着替え、練習後のシャワー、合宿時の宿舎、トレーニングジム、ミーティングルーム、談話縁側、宴会場、ゲームルーム、雀荘、そしてたまに勉強部屋と、変幻自在の魔法の空間でした。

僕は、この寮から入学試験を受けに行き、この寮から卒業式に出席しました。入学式の 1 週間ほど前に稲天寮に引っ越しましたが、当時は、稲天寮に住んでいる部員は、丹生高校出身の尾崎剛敏主将（1979 年卒）と川棚高校出身の吉川康徳（1978 年卒）寮長だけで、使われていない部屋が 4 つもありました。そのため、僕と一緒に大阪から出てきた嶋原優君は、新入生にも関わらず、それぞれ 2 段ベッドのついた 8 畳部屋をあてがってもらい、新生活を始めました

グラウンドまで 30 秒、寮費は、光熱費込み、シャワー使い放題、尾崎主将の早朝練習付で月 4500 円と格安物件でしたが、建物や部屋の鍵もなく、プライバシーなどというものは概念さえ存在せず、OB や部員が、時間に関係なくやってきる環境でした。僕自身は、初めての一人暮らしで、このような環境での生活を特に不思議に思うことなく、4 年間生活しま

したが、今、考えると稲天寮で生活させていただいたおかげで、賑やかで、濃密な青春時代を過ごすことができたと大変感謝しています。

数年前、阿左美利男（1951 年卒）さんが、稲天寮の建設時の寄付金の管理をしていたという話を聞き、建設の歴史を聞く機会がありました。

稲天寮は、1952 年にホッケー部が創設 30 周年を迎えるにあたり、当時稲門ホッケー倶楽部の会長だった廣瀬藤四郎（1929 年卒）さんが、記念事業としてホッケー部合宿所の建築を計画し、大学に陳情したそうです。大学からは、大学が合宿所を建てることはできないが、建築費用をホッケー部で負担するのなら問題ないとの回答があったため、卒業生や学生から募金を集めることにされたようです。集まった寄付の金額は不明ですが、当時は、1950 年に始まった朝鮮戦争による特需の真っただ中で、日本全国が好景気であったこと、廣瀬藤四郎さんが常務取締役を務められていた神崎製紙の工場建設を山本義樹（1929 年卒）さんが役員を務める建設会社が請け負っていたことなどの背景があり、ご両名の協力であっという間に建ててしまったと聞きました。

稲天寮の隣近所に建っていたスキー部、競走部、ア式蹴球部などの合宿所も同様に卒業生の寄付によって作られたのではないかと思いますが、稲天寮が一番道路に近く、日当たりの良い場所に建っていたのは、建設時期が最も早かったからではないかと考えています。

その後、稲天寮はホッケー部員の寮として、1990 年に解体されるまで、38 年間にわたり、ホッケー部員に様々な青春の思い出を残してくれました。改めて、稲天寮を建設していただいた諸先輩に感謝します。

10. ホッケー部創設百周年に寄せて　　小田洋一郎（1985 年卒）

ホッケー部創設百周年おめでとうございます。私は 2009 年から 2012 年まで男子ホッケー部の監督を務めました。そのころの思い出を綴りたいと思います。

私が就任した当初、男子ホッケー部は長い間優勝から遠ざかっており、部員数も 15 名しかおらず、GK2 人を除くと交代選手は 3 名だけでした。ご存じの通り現在のホッケーは交代が自由なので他校が入れ替え立ち替え選手交代し体力を温存する中、早稲田はほぼ全員がフル出場しなければならず、戦う前からハンデのある状態でした。さらに春先はけが人

や就職活動が重なり、7 人で試合をしなければならない時もあり、これは大変なものを引き受けてしまったなというのが正直な気持ちでした。

しかしながら春の関東学生リーグが始まるとあれよあれよという間に勝ち進み、決勝では山梨学院大学に藤本一平（3 年 天理高）の延長 V ゴールにより 2 対 1 で勝ち、25 季ぶりに優勝することができました。

自分でも予想もしなかった就任早々の優勝に喜びよりも驚きが大きかったことを鮮明に覚えています。勢いに乗ったチームは、続く大学王座決定戦も決勝で立命館に敗れたものの準優勝しました。好成績の理由としては坂田主将（八頭高）を中心にシーズンが進むにつれチームが一つにまとまっていったことが一番に挙げられますが、学生スポーツは気持ち次第で結果が変わってくるという意をあらためて強くしました。

監督二年目（藤本主将)、三年目（多和田主将 岐阜総合）については初年度よりも戦力が充実していたにもかかわらず、結果が出せないつらい状況が続きました。思うような戦績が残せないとチームの雰囲気も悪くなります。そのような中、自分にできることは選手に寄り添うことと考え、会社勤めとの二足の草鞋という限られた時間の中で極力学生と接し、気持ちを通じ合えるように努めました。そのような対応が実を結んだのかどうかはわかりませんが、監督最後の年となった 2012 年度は監督初年度同様、順調に勝ち進み、春季リーグは決勝で慶応大学を破り優勝、続く大学王座決定戦でも準決勝で当時大学 No.1 の立命館に勝利することができました。

決勝戦は豪雨の中、天理大学相手に優勢に試合を運びましたが、カウンターから 1 点を取られ 0-1 のまま前半で試合は中断、後半については半年後の秋のインカレ直前に実施され、残念ながらそのまま敗れてしまいましたが、吉川主将（横田高)、森川副将（伊吹高）の二人だけの四年生を中心にまとまった、穴の少ない良いチームだったと思います。

前述したとおり、私の監督時代は部員数不足との戦いでした。他の強豪校に比べ、推薦入学者は極端に少なく、常に選手層の薄さに悩まされていました。監督時代に自分が最もエネルギーを注いだのは間違いなく新入部員の勧誘でした。高校の監督さんたちと連絡を取り、学業評定平均点の高い選手に自己推薦（AO 入試）の受験を勧め、偏差値の高い高校生を探しては一般受験をお願いし、付属高校（高等学院）の選手が大学でもホッケーを続ける意欲を持つよう、日ごろからコミュニケーションを取り、少しずつ部員数を増やし、最後の年はなんとか 20 名まで部員を増やすことができました。

監督時代、あまり誇れることはありませんが、4 年間で退部者を一人も出さなかったのはひそかな自慢です。今思うと部員が少なかったので一人一人に目が届き、それぞれの悩み、喜び、考えを共有できたことが良かったのかもしれません。

また当時は寺本先輩が総監督として東伏見に常駐しており、土日祝日しか顔を出せない私に代わり、サポートいただいたことも大変大きかったと感じています。

今の早稲田大学ホッケー部はスポーツ推薦入学者がほとんどいなくなり、付属校、一般受験者中心で活動しています。現有勢力を考えるとなかなか健闘していると思いますが、核になる選手が足らず、なかなか優勝に届かない状況が続いています。

100 年の部史のなかで栄枯盛衰はありますが、近い将来、早稲田大学ホッケー部が再び覇権を争う日が来ることを祈っています。

11. 第 61 回全日本ホッケー選手権大会優勝と当時の様子を顧みて

田村保（1988 年卒）

祝・早稲田大学ホッケー部創立百周年。今後益々のご隆盛を祈念いたします。早稲田大学を卒業して 36 年経ちました。（2023 年 1 月現在）ホッケー部百周年記念冊子作成の原稿を 2 年先輩の蓑田透さんに依頼され、その当時の様子を思い出しながら記載しました。内容に間違いがありましたらご容赦願います。

1987 年 12 月 13 日（日）、全日本選手権大会決勝戦の当日、積雪の為、試合が中止となり同じく決勝に進んだ天理大学と共に優勝となり、早稲田大学としては 21 年振り 8 度目の優勝を達成することができました。翌日の決勝戦も協議したようですがこの日の夕刻、両チームの選手に全日本ジュニアチームのマカオ遠征へ出発予定の選手がおり、決勝戦は断念したようです。過去の記録を顧みてもこの年だけ中止のようです。（1947 年に決勝戦の抽選？あり）

当時のホッケー部員の中心は早稲田大学高等学院ホッケー部の卒業生、これに 1983 年からスタートしたスポーツ特別選抜入試により入部した全国各地の実績のある選手が加わり、更に大学から始めた初心者も入部し、他の大学では類のない選手の集団でありました。部の雰囲気は良識ある大学生の関係でアットホーム的なチームでありました。しかし、お酒の席となりますと人が変わったように呑まれて、特にも蕎麦屋の三晃庵前の踏切で電車を止めてしまいOB の田瀬弘美さんが東伏見駅の駅員さんに謝罪していたことが記憶に残っています。また、当時はホッケー部専用の寮（稲天寮）があり、冬の寒さは岩手出身なので平気でしたが夏は暑くて大変でしたがかなり鍛えられました。東京都外のホッ

ケー部員は寮にお世話になっていましたが、私が 1 年の時、2 つ上の先輩で学院出身の飯泉康弘さんも何故か寮に住むことになり生活面等大変お世話になったことが懐かしく思い出します。かなり古い建物でしたが門限なども無く自由な生活で居心地の良い寮でした。

スタッフは監督に佐野二郎氏（前稲門ホッケー倶楽部会長)、コーチには、故人市川日出男氏（全日本男子監督経験者・図解ホッケー著作)・小倉文雄氏（現アジアホッケー連盟会長）の 3 名で今にして思えば最強スタッフにご指導頂き感謝しております。

練習は東伏見のクレーのグランドで隣は馬術部の厩舎、東ハト・キャラメールコーンの工場が近くにあり、馬糞とキャラメルコーンの匂いが良く漂っていました。入学当初は 16 時からの練習に授業の都合で部員が揃わないので夏場の一時期は 5 時からの早朝練習を実施しておりました。監督も朝早くから練習に来てくださり（一度疲労で倒れたこともあり）頭の下がる思いでした。練習の基本は学生主体でしたが、監督・コーチから指示を受けて練習することもありました。シーズン前のラントレでは日課の井之頭公園往復、上石神井公園インターバル、最後は小平霊園往復等とにかく走っていました。

優勝した前年度（1986 年）は唯一の 4 年生、和田剛主将以下、選手 12 名と少数でしたが早稲田大学としては久しぶりの全日本選手権への出場を果たしました。また、この年は慶応大学も出場し早慶揃っての出場は 20 年振りということでマスコミ取り上げられました。試合は予選リーグ最終戦の天理大学戦で勝てば決勝進出でしたが接戦の末、2 対 3 で敗れました。

最終学年は前年の悔しさをバネに部員 16 名で更なる高みを目指しました。しかし、大学王座は優勝した法政大学に敗れ、インカレも準決勝で天理大学に敗れ、ようやく最後の全日本で天理大学と優勝を分け合うことが出来ホットした感がありました。周囲に決勝戦が中止でなかったら勝てたと思いますか？と良く質問されましたが私は返す言葉を濁していました。前年までは天理大学が圧倒的な存在でしたが、この年は上位チームの力が拮抗しており、大学王座は法政大学優勝（早稲田出場)、インカレは明治大学優勝（早稲田 4 位)、全日本は早稲田大学・天理大学の両校優勝で締めました。この優勝のおかげで大学主催の食事会の招待や、卒業式においては早稲田大学で最も名誉ある賞、小野梓記念賞を受賞し、純銀に金メッキを施したメダルを授与され、素晴らしい体験をさせて頂き有難く思っております。なお、1 番大きいメダルは佐野二郎監督へプレゼントした記憶があります。また、この年はラグビー部も全日本

選手権で優勝し、同じく受賞し、ラグビー部の永田隆憲主将と記念撮影した覚えがあります。

最後に優勝した記録を記し、終わりといたします。

第 61 回全日本ホッケー選手権大会

時: 1987 年 12 月 10 日～13 日

所: 東京都（財）三菱養和会巣鴨スポーツセンターグランド他

【試合結果】

Ａプール	12 月 10 日	第 1 戦	早稲田大学	3 対 0　表示灯
	12 月 11 日	第 2 戦	早稲田大学	3 対 1　京都クラブ
	12 月 12 日	第 3 戦	早稲田大学	1 対 1　明治大学
	※2 勝 1 分でＡプール 1 位　決勝進出			
決勝戦	12 月 13 日	対天理大学　積雪のため試合中止　両チーム優勝		

12. 女子部創設　　伊東佳織（1994 年卒）

1991 年、長かった受験生時代を終え上京し憧れの早稲田大学に入学、当時はバブル景気の末期とはいえまだその余韻が強く残る中、華やかな「東京・女子大生」生活に期待に胸膨らませておりました。当時の王道？であったテニスサークルにも入会、楽しいことばかりの大学生活が送れるはずだと確信していましたが、残念ながらその浅はかな期待は数ヶ月でもろくも崩れ去りました。「特別な目的・責任もなくただ楽しむ毎日」といった、今考えてみれば学生の特権であり羨ましいこと限りない環境に、当時は全く満足感が得られず、目的を持って努力しそれを成し遂げることによって得られる達成感、満足感、自己成長を得たいと強く望み「目指すべきもの」を探していた気がします。

そんなときに出会ったのが体育の授業で履修したホッケーでした。同授業には、同様に日々の大学生活に物足りなさを感じ本気で何かに打ち込みたいと考えていた太山浩見（旧姓・関/副将)、永穂智子（旧姓・小松/主務）をはじめとする数名の初代女子ホッケー部のメンバーが参加していましたが、もちろん当初は体育会への入部（女子部創設）など全く想定していませんでしたしそれにふさわしい心構えを持てていたとは到底言えませんでした。そんな我々が伝統ある早稲田大学ホッケー部に入部・女子部の初代メンバーとなることができたのは、授業でホッケーの指導をされておられた佐野二郎先生のお導きに他なりません。早稲田大学における女性活躍を強く願っておられた佐野先生の信念、懐深く温かいお声掛け、我々のような素人・若輩者に対しての忍耐強くかつ愛情深いご指導がなけれ

ば女子部の創設はなかったと、今振り返っても佐野先生に対する感謝と尊敬の念に堪えません。

その後、ホッケーというスポーツの魅力もあり同期メンバー・後輩が多く集まりましたが、体育会ホッケー部への入部（女子部創設）というフェーズにあたりその方向性の違いから去って行った者も決して少なくはありませんでした。しかし彼らの貢献・存在を経てこそ、女子ホッケー部は一つのチームとして成長していったのでありこの場を借りて彼らへの感謝の念も述べさせて頂きたいと思います。

そんな技術的にも精神的にもほぼ素人集団であった我々に根気強くご指導くださった、当時の男子部諸先輩方（93 年卒）、太山新一さん（主将）、上鵜瀬弘さん（副将）、久我晃広さん（副将）、永穂展英さん（主務）、山崎壮一郎さんにも心から感謝を申し上げたいと思います。特に永穂先輩はご自身が男子部を引退されて後 1 年間女子部のコーチを務めて頂き、時に厳しくしかし常に深い愛情を持って我々を導いてくださいました。

我々初代 94 年卒が在籍していた時点での女子部は、上述の通り初心者集団であり実力的にはまだまだ振るわず、成績も芳しくはありませんでした。初めてのリーグ戦では 2 部上位まで食い込み 1 部との入れ替え戦に臨みましたが、武蔵大学に 0-7 と惨敗し華々しい結果を残すことはできませんでした。しかしながらその後、現在まで女子部の活躍は皆様もご承知のとおりめざましいものがあり、我々初代メンバーがその礎の一部を築く存在であり得ていることを大変誇りに思い、今後の女子ホッケー部のさらなるご活躍を心からお祈りする次第です。

13. We are Hockey Family　　藤本一平（2011 年卒）

早稲田大学ホッケー部創立百周年おめでとうございます。卒業後、10 年以上の歳月が流れましたが仲間たちとホッケーに打ち込んだ 4 年間は今でも心の支えになっています。学生時代のエピソードは当時の監督・小田洋一郎さんに執筆いただいていますので、私は男子部コーチとして、また、仕事としてホッケーの普及活動に関わっている立場から、ホッケー界の現状と今後について綴りたいと思います。

早稲田大学ホッケー部は 2022 年に創設百周年を迎えましたが、日本ホッケー協会（JHA）は 2023 年に設立百周年を迎えます。JHA は東京 2020 五輪後の 10 年を見据えて「Japan Hockey Road to 2030」を策定しました。そのなかで「ホッケーに何らかの形で関与する人々」を「ホッケーファミリー」と定義し、2030 年ホッケーワールドカップを日本で開催することをマイルストンとしています。

東京 2020 五輪のレガシーの一つ、大井ホッケー競技場（大田区・品川区）は、改修工事を経て 2022 年 6 月に再開業し、2022 年は全日本選手権や全日本学生選手権、全国スポーツ少年団交流大会、関東学生ホッケーリーグなど様々な大会が開催されました。8 月には国際親善大会「SOMPO JAPAN CUP」が開催され、男子日本代表サムライジャパンはオーストラリア代表、女子さくらジャパンはアルゼンチン代表と対戦。早稲田大学男子部はボランティアスタッフとして、ボールパトロールなどを務め、世界トップレベルのプレーを間近で学ぶ機会を得ることができました。11 月には 60 歳以上のワールドカップ「WMH マスターズホッケーワールドカップ」が開催され、稲門ホッケー倶楽部の諸先輩方（写真左から雨宮三郎さん/1969 年卒、藤本、宮本隆三さん/1968 年卒、後藤幸男さん/1977 年卒）も出場し、往年の名選手たちによる激戦が繰り広げられました。

東京 1964 五輪のレガシー、駒沢オリンピック公園では、高校生・大学生の大会や東京都ホッケー協会が主催する大会や初心者の方も参加できる体験イベントなども開催されています。主にフットサルコートを使用する弊社（特定非営利活動法人マイホッケープラス）主催の個人参加型のミニゲーム大会「TOKYO Twinkle Hockey」では、10 代の子どもから 60 代以上のマスターズまで老若男女が入り混じってホッケーに興じており、気軽にホッケーができる機会が増えています。また、全国各地のスポーツ少年団や中高生の部活動、地域の社会人チーム、協会などでは多くの稲門ホッケー倶楽部の方々が活躍されています。（先生方にはぜひ早稲田に選手を送り込んでいただきたいです）

ホッケー日本リーグをはじめ、様々な大会でライブ配信が行われるようになり、現地に行かなくても観戦を楽しめる環境も整ってきました。2022 年は早稲田大学の試合もライブ配信を実施いたしました。

発展途上の部分はありますが、すこしずつホッケーができる環境や、ホッケーを観戦できる環境、ホッケーに関われる環境が広がってきています。

早稲田ホッケーの新たな百年。そして、日本ホッケーの新たな百年。ホッケーと疎遠になってしまっていたみなさまは、この節目をきっかけに、もう一度、ホッケーに関わってみませんか？ホッケーと関わりの深いみなさまはさらに周りの方々を巻き込んで、ホッケーファミリーを増やしていきましょう！

We are Hockey Family!

14. 紡がれていく繋がりとともに　　三柴明日香さん（2014 年卒）

ソフトボールの授業で立ち寄った東伏見。思い返せばそれがすべての始まりでした。

大学 1 年生になるまで、私はフィールドホッケーというスポーツの存在すら知りませんでした。幼い頃からご家族とともにホッケーに親しみ、試合会場へ行けば必ずと言っていいほど知り合いがいる仲間たち。当時経験者が多かった女子部に初心者として入部した私は、そんな仲間たちの姿を見れば見るほど自分だけ場違いであるように感じ、何かしらできることを見つけなければと必死でした。

それでも、辞めることを本気で考えたことは不思議とありません。

それは間違いなく、度々折れそうになる自分の心の杖になってくれるような同期や先輩、後輩、OB・OG の皆さんの存在があったからです。文学部所属で教職も取っていたため、時間通り練習に参加できない日が多い中、自主練習に付き合ってくれた同期・先輩たち。壁を作ることなく共に悩み、ホッケーの先輩として正直にアドバイスしてくれた後輩たち。貴重な休日の早朝からグラウンドへ来て、わずかな成長や変化を見逃さず励ましてくれた OB・OG の先輩方。見渡せば、私が勝手に抱いていた疎外感を吹き飛ばしてくれるような人たちばかりでした。

そして、劣等感や無力感を覚える強い心の痛みを知った分、私は誰かの深い優しさや思いやりに気づけるようになった気がします。

人との関係性のみならず、ホッケーが盛んな地域や、大切な仲間たちが生まれ育った場所を知ることができたことも、私にとって大きな財産です。同期の出身地に旅行へ行ってみたり、地域の歴史をたどってみたり、特産品を取り寄せてみたり、日本を楽しむ新しい鍵をもらいました。

「自分が本気で学んだ場所に帰ってくると、自分が今どこにいるのか、何をすべきか見えてくる。」

私がお世話になった李成市教授が、卒業時に贈ってくださった言葉です。

早稲田大学に入らなければ、ホッケー部に入らなければ出会えなかった人、場所。ふと立ち止まってしまう時、ここで出会えた人や場所をもう一度思い返して、自分を奮い立たせてきました。
ある程度期間が空いても、会えば昔の関係にすっと戻れてしまう心地良さ。未来に悩む時、どのように生きていくか立ち止まって一緒にもがいてくれる、時に笑い飛ばし、時に背中を押してくれる人たちがそばにいてくれること。想像もしなかったようなことが次々と起こるこの世界で、その心強さは何ものにも代え難いものです。

「集り散じて　人は変れど　仰ぐは同じき　理想の光」

それぞれがそれぞれの場所で人生を歩んでいく中で、もちろん理想や目指すところは違うかもしれませんが、早稲田大学ホッケー部で分かち合ったものは各々の心の中に確かに残っていくのだと思います。

100 年という長い歳月をかけて築かれてきた人と人との繋がり、自分がその一部になれている喜びを感じつつ、その繋がりをこれからも大切に紡いでいける自分であれたらと願っています。

15. ホッケーを通じた縁　　本名江里（2016 年卒）

この度は、早稲田大学ホッケー部の創立百周年を迎えられたことを心よりお祝い 申し上げます。この早稲田大学ホッケー部の記念すべき百周年記念誌に携わることができ、とても光栄です。

今回ご依頼頂いた執筆内容は、「私と主人のホッケーを通じた縁について」です。慶應ホッケー部と早稲田ホッケー部の関係について、百年の歴史の中でもっとも素晴らしい出来事は、私たちカップルの誕生だとお聞きし、私自身とてもびっくりしています。私たちの出逢いは、百周年記念誌に掲載するほど素晴らしいものではないので、執筆するかとても迷いましたが、記念すべき百周年ということで、歴史に残ると思い、お受けさせていただきました。お恥ずかしいですが、お付き合いください。

さて、私が主人と出逢ったのは、2015 年の早慶戦の時です。早慶戦後の交流会で、男子部同期の川原君が紹介してくれたのがきっかけで、主人と仲良くなりました。それまで、話したこともなく、顔さえも見たことがありませんでした。正直、話すまでは、慶應＝お堅いイメージがありましたが、話しているうちに趣味や共通点が多く、自然と意気投合しました。またポジションも近いことから、ずっとホッケーの話をしていました。そこから、交際に至るまでは、時間はかかりませんでした。お付き合い中は、お互いの試合のビデオを見て、お互いのプレーを、私はフィールド目線で、主人はゴールキーパー目線で、アドバイスし合い、次の試合に活かしていました。ライバルであり、よき相談相手でした。交際中はお互いの意見を尊重し、尊敬し合いあまり喧嘩がなく、平和に過ごしていました。

4 年生になり、私は主将、主人は副将になりました。上に立つ立場になり、授業中も移動中もホッケーのことで頭がいっぱいでした。どうしたらチームを良くできるか、強くできるか常に考えていました。考えすぎて、頭がパンクしそうでした。私は性格上何でも 1 人でやってしまうところがあったので、その時は精神的にすごく辛かった思い出があります。そんな時は、いつも主人が話を聞いてくれて、そばにいてくれました。並行して就職活動が始まっていましたので、更に忙しい日々を送りました。お互い忙しい中でも、会う時間を見つけ会っていましたが、会話に出るのは、やはりホッケーの話ばかりでした。私たちの頭の中は、常に「ホッケー」が一番にありました。

そして、1 年半程お付き合いし、結婚致しました。私が仕事で体調を崩し辞めようか悩んでいたところ、主人が一緒に暮らそうと言ってくれたのがきっかけです。現在は、主人の仕事の関係で、茨城県に住んでおります。また 4 歳と 1 歳の可愛娘たちがおり、幸せに暮らしています。

私が栃木出身、主人は東京出身、お互いホッケーを続けていなければ出会えなかったと思います。ホッケーの縁に感謝です。

16. 101 年目の抱負　　中島丞一郎（2023 年度男子部主将）

百周年を現役学生として迎えることで、早稲田ホッケーの歴史を知る機会に恵まれました。全日本選手権優勝 9 回、全日本学生選手権優勝 1 回、さらに関東学生リーグにおいては、春秋通じて優勝 21 回ものの優勝を数えているといった栄光の記録だけでなく、アイスホッケーから始まったというホッケー部の成り立ちや、戦中・戦後の先輩方のご苦労などはとても興味深く、百年をつないできた重みを感じました。そして、このような歴史と伝統のある早稲田大学ホッケー部の一員であることに私は誇りを感じております。

さて、私たちは次の百年のスタートに立っています。新たな歴史に向けて、勢いをつけられるように部員一同精進していきたいと思います。

昨年は、関東学生リーグでは春秋共に 6 位、インカレではベスト 8 と、私たちが持っている力を存分に発揮することができませんでした。また、早慶戦では 5 年間「優勝」という文字を OB・OG の方々にお見せすることができていません。今年のチームは、「Plus Ultra（ラテン語: もっと向こうへ)」をスローガンに、一人一人が決めたことを有言実行し、さらなる前進を目指しています。そして、何としても結果を残すためには、これまでの取り組み方を「改革」しなければ、という思いで臨んでいます。特に、自分の弱みとしっかり向き合い、日々の練習に励んでいます。

今年こそは、関東リーグ制覇・早慶戦優勝・全国大会ベスト 4 を達成し、OB・OG の方々に良い報告をしたいと思います。皆様の熱いご声援・ご指導よろしくお願い申し上げます。

私たちも誇れる一歩を刻むことができるよう、全力を尽くします。

17. 101 年目の抱負　　吉野真啓（2023 年度女子部主将）

私たち女子ホッケー部は「全国大会ベスト 8 以上、関東 1 部リーグ決勝進出+得点、早慶戦優勝」を今年の目標として掲げています。昨年は関東リーグ決勝進出という目標のみ達成できず、部員全員が非常に悔しい思いをしました。私たちが決勝進出するためには経験者のみで構成されたチームに勝つことが絶対条件です。やはり経験年数が高い選手ほど試合中のボールの読みやポジショニング、身体の使い方やドリブルテクニックなどが高度であり、大学から始めた部員がそれを上回ることは至難の業であると考えました。そのため、私たちがすべき対策は、フィジカルの強化、基礎スキルの構築、戦術理解の 3 つであると考えます。フィジカル強化ではトレーナーさんの指導の下、ホッケー中に使

う筋肉を重点的に鍛えるウエイトトレーニング、またゲーム形式のラントレーニングを行うことで他大学に当たり負けしない身体と走り負けしない持久力を構築します。基礎スキルの構築に関しては、ただ止まった状態で 2 人組のパスをする練習だけではなく、動きながら右足で踏み込むプッシュストロークや、多方面からのボールに対し首振りを行ってトラップする練習など試合中により近い練習を組み込みます。また戦術理解に関しては、練習の中で部員全員に確認を取りながら進め、誰 1 人として分からない状態を作らないように努めます。このような具体策を講じ、私達女子ホッケー部は必ず目標を達成します。また、ホッケーの成績以外につきましても、100 年の歴史ある部活の名に恥じぬように部員全員が早稲田大学ホッケー部としての自覚を持った行動に務めます。歴史ある 100 年目が早稲田の年になるよう日々尽力します。これからも応援のほどよろしくお願いします。

ホッケー部100年の歩み

1. 年表

年	活動
1922年（大正11年）	早稲田大学においてホッケーの活動を開始
1923年（大正12年）	大日本ホッケー協会発足、選抜紅白戦に早大から2名出場
1924年（大正13年）	スケートホッケー部として早大体育会に公認 第2回全日本ホッケー選手権に初参加し、準優勝、第1回早慶ホッケー定期戦開催
1926年（昭和元年）	第4回全日本ホッケー選手権優勝
1929年（昭和4年）	第7回全日本ホッケー選手権優勝
1932年（昭和6年）	ロサンゼルスオリンピックのホッケー日本チームに、監督として廣瀬藤四郎、選手として小西健一、今治彦、猪原淳三、左右田秋男が参加。日本のオリンピック団体種目として初のメダルとなる銀メダル獲得
1936年（昭和11年）頃	東伏見にホッケーグランド完成（現在の馬術部の場所）
1936年（昭和11年）	第14回全日本ホッケー選手権優勝 ベルリンオリンピックに杉山益男が参加。結果は予選敗退
1946年（昭和21年）	スケートホッケー部からホッケー部が独立し、27番目の部として体育会に公認
1952年（昭和27年）	創設30周年記念として、OBにより東伏見にホッケー部寮の稲天寮完成 30周年記念式典開催
1960年（昭和35年）	ローマオリンピックに、コーチとして市川日出男、選手として、木原征治、中山弘が参加
1964年（昭和39年）	東京オリンピックに、選手として木原征治、橋本征治、吉村実が参加。結果はベスト8 第38回全日本ホッケー選手権優勝（全早大）
1965年（昭和40年）	第39回全日本ホッケー選手権優勝（全早大）
1966年（昭和41年）	第40回全日本ホッケー選手権優勝
1967年（昭和42年）	第41回全日本ホッケー選手権優勝（早大・天理大両者優勝）
1968年（昭和43年）	メキシコオリンピックに、監督として市川日出男、選手として吉村実、大塚智万、和田明仁が参加
1969年（昭和44年）	第18回全日本学生ホッケー選手権（インカレ）優勝。
1972年（昭和47年）	50周年記念式典開催
1975年（昭和50年）	第1回早大・防衛大ホッケー定期戦（現在休止中）
1987年（昭和62年）	第61回全日本ホッケー選手権優勝（早大・天理大両者優勝）
1990年（平成2年）	稲天寮取壊し
1991年（平成3年）	女子部創設（1993年体育会に公認） 東伏見のホッケーグランドに夜間照明設置。
1992年（平成4年）	70周年記念の集い開催
2003年（平成15年）	東伏見のホッケーグランドが、現在の場所（旧ラグビーグランド）に移転
2006年（平成18年）	ホッケーグランドを人工芝化
2009年（平成21年）	女子部 東日本学生ホッケー選手権（東日本インカレ）優勝
2011年（平成23年）	女子部 東日本学生ホッケー選手権（東日本インカレ）優勝
2013年（平成25年）	90周年記念の集い開催
2022年（令和4年）	創設百周年記念イヤーとして募金等の記念事業を実施

2. 戦績一覧

1. 全日本選手権

男子優勝 9 回（うち 2 回は全早大)、準優勝 4 回。

回数	開催年	開催場所	対戦相手	スコア	結果
第2回	1924年	戸山学校競技場	陸軍戸山学校	0－1	準優勝
第4回	1926年	戸山学校競技場	稲門ホッケー倶楽部	4－2	優勝
第7回	1929年	戸山学校競技場	三田クラブ	4－0	優勝
第9回	1931年	戸山学校競技場	名古屋高等商業学校	10－1	優勝
第14回	1936年	戸山学校競技場	京都帝国大学	7－0	優勝
第38回	1964年	駒沢球技場	慶応大（全早大）	4－0	優勝
第39回	1965年	駒沢球技場	明治大（全早大）	2－0	優勝
第40回	1966年	駒沢球技場	慶応大学	3－1	優勝
第41回	1967年	広島県綜合グラウンド	天理大学	0－0	両者優勝
第43回	1969年	駒沢球技場	天理大学	0－1	準優勝
第48回	1974年	静岡県駿河平	天理大学	1－4	準優勝
第61回	1987年	三菱巣鴨グラウンド他	天理大学	降雪中止	両者優勝

2. 全日本学生選手権（インカレ）

男子優勝 1 回、準優勝 4 回。

回数	開催年	開催場所	対戦相手	スコア	結果
第2回	1953年	駒沢球技場	明治大学	0－4	準優勝
第11回	1962年	富山県立石動高校	明治大学	0－1	準優勝
第12回	1963年	岐阜県立岐阜西工業高校	明治大学	1－2	準優勝
第18回	1969年	天理大学グラウンド	天理大学	3－2	優勝
第45回	1996年	明治大学グラウンド他	天理大学	1－3	準優勝

3. 大学東西王座

男子優勝 1 回。

回数	開催年	開催場所	対戦相手	スコア	結果
第1回	1965年	駒沢球技場	明治大学	2－1	優勝

4. 全日本大学ホッケー王座決定戦

男子準優勝 2 回。

第 29 回 2009 年、第 32 回 2012 年

5. 東日本学生選手権

女子優勝 2 回。

第 8 回 2009 年、第 10 回 2011 年

6.　関東学生リーグ

男子優勝 21 回

1927 年 春季、1928 年 春季、1929 年 秋季、1931 年 秋季、1936 年 秋季、1942 年 春季、1948 年 春季,秋季、1963 年 秋季、1965 年 春季、1967 年 秋季、1970 年 秋季、1973 年 春季、1974 年 春季、1986 年 秋季、1991 年 秋季、1994 年 秋季、1996 年 秋季、2009 年 春季、2012 年 春季、2013 年 秋季

3. 早慶ホッケー定期戦戦績

男子: 39 勝 39 敗 18 分、女子: 19 勝 9 敗 2 分（2022 年まで）

年	男子			開催場所
	回	結果		
1924年(大正13年)	1	2-5	●	早大戸塚グランド
1925年(大正14年)	2	0-3	●	陸軍戸山学校ｸﾞﾗﾝﾄﾞ
1926年(大正15年)	3	6-0	○	三田綱町グランド
1927年(昭和02年)	4	3-1	○	明治神宮外苑競技場
1928年(昭和03年)	5	3-4	●	明治神宮外苑競技場
1929年(昭和04年)	6	6-1	○	明治神宮外苑競技場
1930年(昭和05年)	7	1-3	●	明治神宮外苑競技場
1931年(昭和06年)	8	1-0	○	明治神宮外苑競技場
1932年(昭和07年)	9	2-4	●	明治神宮外苑競技場
1933年(昭和08年)	10	1-3	●	明治神宮外苑競技場
1934年(昭和09年)	11	2-3	●	明治神宮外苑競技場
1935年(昭和10年)	12	3-5	●	明治神宮外苑競技場
1936年(昭和11年)	13	2-0	○	明治神宮外苑競技場
1937年(昭和12年)	14	2-4	●	明治神宮外苑競技場
1938年(昭和13年)	15	2-3	●	明治神宮外苑競技場
1939年(昭和14年)	16	1-4	●	明治神宮外苑競技場
1940年(昭和15年)	17	2-3	●	明治神宮外苑競技場
1941年(昭和16年)	18	1-2	●	慶大日吉グランド
1942年(昭和17年)	19	1-1	△	慶大日吉グランド
1943年(昭和18年)	20	1-0	○	早大東伏見グランド
1944年(昭和19年)	戦争のため中止			
1945年(昭和20年)	戦争のため中止			
1946年(昭和21年)	戦争のため中止			
1947年(昭和22年)	21	5-2	○	早大東伏見グランド
1948年(昭和23年)	22	0-0	△	成城大学グランド
1949年(昭和24年)	23	0-2	●	駒沢公園第一球技場
1950年(昭和25年)	24	3-4	●	駒沢公園第一球技場
1951年(昭和26年)	25	8-1	○	駒沢公園第一球技場
1952年(昭和27年)	26	0-0	△	明治神宮外苑競技場
1953年(昭和28年)	27	1-4	●	明治神宮外苑競技場
1954年(昭和29年)	28	3-0	○	明治神宮外苑競技場
1955年(昭和30年)	29	2-2	△	明治神宮外苑競技場
1956年(昭和31年)	30	4-4	△	慶大日吉グランド
1957年(昭和32年)	31	0-7	●	後楽園競輪場
1958年(昭和33年)	32	3-4	●	国立競技場
1959年(昭和34年)	33	1-2	●	後楽園競輪場
1960年(昭和35年)	34	1-3	●	国立競技場
1961年(昭和36年)	35	3-3	△	国立競技場
1962年(昭和37年)	36	4-0	○	慶大日吉グランド
1963年(昭和38年)	37	0-1	●	早大東伏見グランド
1964年(昭和39年)	38	1-0	○	駒沢公園第一球技場
1965年(昭和40年)	39	1-0	○	駒沢公園第一球技場
1966年(昭和41年)	40	0-2	●	駒沢公園第一球技場
1967年(昭和42年)	41	2-0	○	駒沢公園第一球技場
1968年(昭和43年)	42	1-1	△	駒沢公園第一球技場
1969年(昭和44年)	43	1-1	△	駒沢公園第一球技場
1970年(昭和45年)	44	1-3	●	駒沢公園第一球技場
1971年(昭和46年)	45	1-1	△	駒沢公園第一球技場
1972年(昭和47年)	46	1-5	●	駒沢公園第一球技場
1973年(昭和48年)	47	1-3	●	駒沢公園第一球技場

年	男子			女子			開催場所
	回	結果		回	結果		
1974年(昭和49年)	48	5-2	○				駒沢公園第一球技場
1975年(昭和50年)	49	2-0	○				早大東伏見グランド
1976年(昭和51年)	50	1-1	△				駒沢公園第一球技場
1977年(昭和52年)	51	2-0	○				駒沢公園第一球技場
1978年(昭和53年)	52	0-4	●				駒沢公園第一球技場
1979年(昭和54年)	53	1-3	●				慶大日吉グランド
1980年(昭和55年)	54	2-1	○				早大東伏見グランド
1981年(昭和56年)	55	1-3	●				駒沢公園第一球技場
1982年(昭和57年)	56	2-3	●				早大東伏見グランド
1983年(昭和58年)	57	0-1	●				三菱巣鴨ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ
1984年(昭和59年)	58	3-2	○				三菱巣鴨ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ
1985年(昭和60年)	59	3-1	○				慶大日吉グランド
1986年(昭和61年)	60	3-1	○				早大東伏見グランド
1987年(昭和62年)	61	3-1	○				慶大日吉グランド
1988年(昭和63年)	62	2-2	△				早大東伏見グランド
1989年(平成01年)	63	1-0	○				慶大日吉グランド
1990年(平成02年)	64	4-1	○				早大東伏見グランド
1991年(平成03年)	65	5-1	○				早大東伏見グランド
1992年(平成04年)	66	1-1	△				早大東伏見グランド
1993年(平成05年)	67	1-0	○	1	0-3	●	慶大日吉グランド
1994年(平成06年)	68	3-0	○	2	2-0	○	早大東伏見グランド
1995年(平成07年)	69	5-1	○	3	0-0	△	慶大日吉グランド
1996年(平成08年)	70	2-1	○	4	1-2	●	慶大日吉グランド
1997年(平成09年)	71	2-1	○	5	0-3	●	慶大日吉グランド
1998年(平成10年)	72	1-0	○	6	1-3	●	慶大日吉グランド
1999年(平成11年)	73	2-1	○	7	1-4	●	慶大日吉グランド
2000年(平成12年)	74	1-2	●	8	4-0	○	慶大日吉グランド
2001年(平成13年)	75	2-0	○	9	0-1	●	慶大日吉グランド
2002年(平成14年)	76	0-1	●	10	1-0	○	慶大日吉グランド
2003年(平成15年)	77	3-2	○	11	2-1	○	慶大日吉グランド
2004年(平成16年)	78	3-4	●	12	0-3	●	慶大日吉グランド
2005年(平成17年)	79	1-3	●	13	2-3	●	慶大日吉グランド
2006年(平成18年)	80	3-6	●	14	1-2	●	早大東伏見グランド
2007年(平成19年)	81	6-0	○	15	3-1	○	慶大日吉グランド
2008年(平成20年)	82	3-1	○	16	4-1	○	早大東伏見グランド
2009年(平成21年)	83	1-2	●	17	2-1	○	慶大日吉グランド
2010年(平成22年)	84	2-1	○	18	4-1	○	早大東伏見グランド
2011年(平成23年)	85	5-3	○	19	1-0	○	慶大日吉グランド
2012年(平成24年)	86	1-1	△	20	3-1	○	早大東伏見グランド
2013年(平成25年)	87	2-5	●	21	2-1	○	慶大日吉グランド
2014年(平成26年)	88	3-1	○	22	6-1	○	早大東伏見グランド
2015年(平成27年)	89	2-2	△	23	3-1	○	慶大日吉グランド
2016年(平成28年)	90	6-0	○	24	3-0	○	早大東伏見グランド
2017年(平成29年)	91	3-1	○	25	1-0	○	駒沢公園第一球技場
2018年(平成30年)	92	2-2	△	26	1-0	○	駒沢公園第一球技場
2019年(令和01年)	93	2-2	△	27	2-1	○	駒沢公園第一球技場
2020年(令和02年)	94	4-4	△	28	1-1	△	駒沢公園第一球技場
2021年(令和03年)	95	1-3	●	29	2-0	○	駒沢公園第一球技場
2022年(令和04年)	96	0-5	●	30	3-1	○	駒沢公園第一球技場

4. 過去の周年事業記念写真

10周年（1933年）

30周年（1952年）

40周年（1962年）

50周年（1972年）

90周年（2013年）

百周年（2022年）

5. オリンピック出場選手

1932年ロサンゼルス
廣瀬藤四郎監督（1929年卒）、小西健一（1932年卒）、今治彦、左右田秋男（1933年卒）、猪原淳三（1934年卒）

1936年ベルリン
杉山益男（1936年卒）

1960年ローマ
市川日出男監督（1940年卒）、中山弘（1957年卒）、木原征治（1963年卒）

1964年東京
木原征治（1963年卒）、橋本征治（1966年卒）、吉村実（1967年卒）

1968年メキシコ
吉村実（1967年卒）、大塚智万（1969年卒）、和田明仁（1969年卒）

6.　　ホッケーを支える卒業生

国際ホッケー連盟、アジアホッケー連盟関係

氏名	卒業年	職名
小倉　文雄	1971年	国際ホッケー連盟(FIH)理事
		アジアホッケー連盟(AHF)会長

公益社団法人 日本ホッケー協会関係

氏名	卒業年	職名
仁賀　建夫	1982年	理事（戦略統括本部 副本部長）
高橋　章	1995年	男子日本代表チーム（サムライジャパン）ヘッドコーチ
安岡　裕美子	2004年	事務局職員

小倉文雄

高橋章

各地で活動している卒業生

都道府県	氏名	卒業年	チーム（役職）
岩手県	田村　保	1988年	岩手県立不来方高等学校男子・岩手県立不来方高等学校女子（監督）
岩手県	岩舘　直也	1988年	岩手県立沼宮内高等学校男子・岩手県立沼宮内高等学校女子（監督）
岩手県	瀧澤　璃菜	2019年	岩手選抜国体成年女子（監督）
福島県	須藤　浩治	1990年	福島県立修明高等学校女子、福島選抜国体少年女子（監督）
茨城県	坂田　洋平	1984年	茨城ＨＣ（コーチ）、東海中学校
栃木県	木村　浩一郎	2016年	栃木県立今市高等学校男子（監督）
栃木県	村山　侑季	2017年	栃木選抜中学11人制女子（監督）
埼玉県	久我　晃広	1993年	駿河台大学女子（監督）
埼玉県	小澤　眞帆	2017年	埼玉県立飯能高等学校（引率責任者）
東京都	太山　新一	1993年	東京ガス（監督）
東京都	原　聡	1984年	東伏見ホッケークラブ（部長・監督）
都道府県	氏名	卒業年	チーム（役職）
東京都	鵜飼　慎之介	2016年	東京選抜国体成年男子（コーチ）
東京都	前田　祐介	2007年	Submarine Hockey Club（監督）、品川ホッケークラブ2020男子（代表者）、品川ホッケークラブ2020女子（代表者）
山梨県	金川　健太	1997年	南アルプスホッケースポーツ少年団男子（コーチ）
福井県	吉田　能克	2001年	福井県立丹生高等学校女子（監督）
岐阜県	小林　和典	1989年	東海学院大学男子・東海学院大学女子（監督）
愛知県	錦織　拓	1994年	中京大学男子・中京大学女子（監督）
愛知県	松田　可奈	2015年	中京大学女子（コーチ）
鳥取県	坂田　陽彦	1984年	八頭町立八頭中学校男子・八頭町立八頭中学校女子（監督）
島根県	元山　貴光	2000年	仁多中学校男子（コーチ）・仁多中学校女子（コーチ）
島根県	植田　拓郎	2008年	仁多中学校男子・仁多中学校女子（監督）
香川県	片平　久光	1989年	香川県立飯山高等学校男子・香川県立飯山高等学校女子
福岡県	山内　光春	1988年	福岡県立玄界高等学校女子
佐賀県	川原　悠雅	2016年	ラフテル伊万里ホッケークラブ（監督）、伊万里ホッケースポーツ少年団男子・伊万里ホッケースポーツ少年団女子（監督）
熊本県	松﨑　光太郎	2004年	熊本県立小国高等学校男子・熊本県立小国高等学校女子

歴代部長・監督・稲門ホッケー倶楽部会長

年	部長	総監督	男子部監督	女子部監督	稲門ホッケー倶楽部会長
1922年(大正11年)	喜多壮一郎	-	-	-	-
1923年(大正12年)	影山千萬樹	-	-	-	-
1924年(大正13年)	影山千萬樹	-	-	-	-
1925年(大正14年)	影山千萬樹	-	-	-	-
1926年(大正15年)	影山千萬樹	-	小口孫六	-	-
1927年(昭和02年)	影山千萬樹	-	小口孫六	-	-
1928年(昭和03年)	影山千萬樹	-	小口孫六	-	-
1929年(昭和04年)	影山千萬樹	-	小口孫六	-	-
1930年(昭和05年)	影山千萬樹	-	小口孫六	-	-
1931年(昭和06年)	喜多壮一郎	-	小口孫六	-	-
1932年(昭和07年)	喜多壮一郎	-	小口孫六	-	-
1933年(昭和08年)	喜多壮一郎	-	小口孫六	-	-
1934年(昭和09年)	喜多壮一郎	-	小口孫六	-	-
1935年(昭和10年)	喜多壮一郎	-	小口孫六	-	-
1936年(昭和11年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1937年(昭和12年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1938年(昭和13年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1939年(昭和14年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1940年(昭和15年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1941年(昭和16年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1942年(昭和17年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1943年(昭和18年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1944年(昭和19年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1945年(昭和20年)	喜多壮一郎	-	小島修三	-	-
1946年(昭和21年)	新庄嘉章	-	高畠誠二	-	廣瀬藤四郎
1947年(昭和22年)	新庄嘉章	-	高畠誠二	-	廣瀬藤四郎
1948年(昭和23年)	新庄嘉章	-	高畠誠二	-	廣瀬藤四郎
1949年(昭和24年)	星川長七	-	細田胖	-	廣瀬藤四郎
1950年(昭和25年)	星川長七	-	細田胖	-	廣瀬藤四郎
1951年(昭和26年)	星川長七	-	市川日出男	-	廣瀬藤四郎
1952年(昭和27年)	星川長七	-	正村慎一郎	-	廣瀬藤四郎
1953年(昭和28年)	星川長七	-	中楯悦郎	-	廣瀬藤四郎
1954年(昭和29年)	星川長七	-	佐野国四郎	-	廣瀬藤四郎
1955年(昭和30年)	星川長七	-	佐野国四郎	-	廣瀬藤四郎
1956年(昭和31年)	星川長七	-	佐野国四郎	-	飯田英三
1957年(昭和32年)	星川長七	-	佐野国四郎	-	飯田英三
1958年(昭和33年)	星川長七	-	佐野国四郎	-	飯田英三
1959年(昭和34年)	星川長七	-	市川日出男	-	飯田英三
1960年(昭和35年)	星川長七	-	市川日出男	-	飯田英三
1961年(昭和36年)	星川長七	-	市川日出男	-	飯田英三
1962年(昭和37年)	星川長七	-	市川日出男	-	猪原淳三
1963年(昭和38年)	星川長七	-	市川日出男	-	猪原淳三
1964年(昭和39年)	星川長七	-	市川日出男	-	中楯悦郎
1965年(昭和40年)	星川長七	-	市川日出男	-	中楯悦郎
1966年(昭和41年)	星川長七	-	市川日出男	-	中楯悦郎
1967年(昭和42年)	星川長七	-	市川日出男	-	中楯悦郎
1968年(昭和43年)	星川長七	-	市川日出男	-	中楯悦郎
1969年(昭和44年)	星川長七	-	市川日出男	-	中楯悦郎
1970年(昭和45年)	星川長七	-	市川日出男	-	中楯悦郎
1971年(昭和46年)	星川長七	-	猪原恭一	-	中楯悦郎

年	部長	総監督	男子部監督	女子部監督	稲門ホッケー 倶楽部会長
1972年(昭和47年)	星川長七	-	古田俊次	-	中楯悦郎
1973年(昭和48年)	星川長七	-	古田俊次	-	中楯悦郎
1974年(昭和49年)	星川長七	-	古田俊次	-	飯田英三
1975年(昭和50年)	星川長七	-	古田俊次	-	飯田英三
1976年(昭和51年)	星川長七	-	古田俊次	-	飯田英三
1977年(昭和52年)	星川長七	-	高畠誠二	-	飯田英三
1978年(昭和53年)	星川長七	-	高畠誠二	-	飯田英三
1979年(昭和54年)	酒巻俊雄	-	高畠誠二	-	河合喜三
1980年(昭和55年)	酒巻俊雄	-	高畠誠二	-	河合喜三
1981年(昭和56年)	酒巻俊雄	-	佐野二郎	-	河合喜三
1982年(昭和57年)	酒巻俊雄	-	佐野二郎	-	河合喜三
1983年(昭和58年)	酒巻俊雄	-	佐野二郎	-	小島雄次
1984年(昭和59年)	酒巻俊雄	-	佐野二郎	-	小島雄次
1985年(昭和60年)	酒巻俊雄	-	佐野二郎	-	小島雄次
1986年(昭和61年)	酒巻俊雄	-	佐野二郎	-	阿左美利男
1987年(昭和62年)	酒巻俊雄	-	佐野二郎	-	阿左美利男
1988年(昭和63年)	酒巻俊雄	-	佐野二郎	-	阿左美利男
1989年(平成01年)	酒巻俊雄	-	佐野二郎	-	阿左美利男
1990年(平成02年)	酒巻俊雄	-	和田明仁	-	阿左美利男
1991年(平成03年)	酒巻俊雄	-	和田明仁	佐野二郎	阿左美利男
1992年(平成04年)	酒巻俊雄	-	和田明仁	佐野二郎	阿左美利男
1993年(平成05年)	酒巻俊雄	-	藤井正二	佐野二郎	阿左美利男
1994年(平成06年)	酒巻俊雄	-	藤井正二	佐野二郎	阿左美利男
1995年(平成07年)	酒巻俊雄	-	藤井正二	佐野二郎	阿左美利男
1996年(平成08年)	酒巻俊雄	-	藤井正二	早川憲雄	阿左美利男
1997年(平成09年)	石山卓磨	-	古田俊次	早川憲雄	阿左美利男
1998年(平成10年)	石山卓磨	-	古田俊次	早川憲雄	阿左美利男
1999年(平成11年)	石山卓磨	-	古田俊次	早川憲雄	阿左美利男
2000年(平成12年)	石山卓磨	-	石田訓	早川憲雄	佐野二郎
2001年(平成13年)	石山卓磨	-	石田訓	早川憲雄	佐野二郎
2002年(平成14年)	中村信男	-	早川憲雄	早川憲雄	佐野二郎
2003年(平成15年)	中村信男	-	早川憲雄	早川憲雄	佐野二郎
2004年(平成16年)	中村信男	-	早川憲雄	早川憲雄	佐野二郎
2005年(平成17年)	中村信男	-	早川憲雄	早川憲雄	佐野二郎
2006年(平成18年)	中村信男	寺本崇	田瀬弘美	早川憲雄	佐野二郎
2007年(平成19年)	中村信男	寺本崇	田瀬弘美	錦織拓	佐野二郎
2008年(平成20年)	中村信男	寺本崇	前田祐介	錦織拓	佐野二郎
2009年(平成21年)	中村信男	寺本崇	小田洋一郎	錦織拓	佐野二郎
2010年(平成22年)	中村信男	寺本崇	小田洋一郎	澤谷保典	佐野二郎
2011年(平成23年)	中村信男	寺本崇	小田洋一郎	澤谷保典	佐野二郎
2012年(平成24年)	中村信男	寺本崇	小田洋一郎	澤谷保典	佐野二郎
2013年(平成25年)	中村信男	原聡	松本剛毅	澤谷保典	佐野二郎
2014年(平成26年)	中村信男	原聡	松本剛毅	安岡裕美子	佐野二郎
2015年(平成27年)	中村信男	原聡	松本剛毅	安岡裕美子	和田明仁
2016年(平成28年)	中村信男	原聡	松本剛毅	安岡裕美子	和田明仁
2017年(平成29年)	中村信男	-	原聡	安岡裕美子	和田明仁
2018年(平成30年)	中村信男	-	原聡	安岡裕美子	和田明仁
2019年(平成31年)	中村信男	-	原聡	安岡裕美子	和田明仁
2020年(令和02年)	中村信男	-	原聡	安岡裕美子	和田明仁
2021年(令和03年)	中村信男	-	原聡	安岡裕美子	和田明仁
2022年(令和04年)	中村信男	-	原聡	安岡裕美子	和田明仁

卒業生名簿

男子部

卒業年	氏名（下線は主将）
1923年(大正12年)	吉田兵吉
1924年(大正13年)	岡本亀吉
1925年(大正14年)	小口孫六、井出五郎、小野篁平、紀藤勇吉、斉藤嘉造、田口尚、千田正、柳沢敏文
1926年(大正15年)	一柳省吾、岡本良太郎、小里頼忠、高津雄二、両角政人
1927年(昭和2年)	小山三郎、黒田重助(旧姓:相原)
1928年(昭和3年)	大久保泰、狩野捨松、後藤丈夫、中島元平、名坂喜久治、松村和雄、南島省三
1929年(昭和4年)	廣瀬藤四郎、朝長実、植木幸次郎、海老沢養助、大沢弥、岡部養之介、金尾敏雄、小堀十朋、西田共二、星野義雄、山本義樹
1930年(昭和5年)	大竹新太郎、岡田敏郎、荻野貞雄、覚張文平、田沼一郎、平井孝吉、平田稔、水上新、吉原虎治郎
1931年(昭和6年)	影山伸一郎、都志清一
1932年(昭和7年)	飯田英三、小口光男、小西健一、真後篤三
1933年(昭和8年)	今治彦、左右田秋男、市村昌之、小島修三、斎藤進、滝沢興準、田沼一郎、藤原文雄、森脇直久
1934年(昭和9年)	猪原淳三、石橋正一、井上稔、荻布一郎、塩澤武雄、橋村秀実、羽田達二
1935年(昭和10年)	中楯悦郎、太田稔、寺島保、西村光雄、別所敏三郎、松木勲
1936年(昭和11年)	杉山益男、佐々木博、辻崎正男、飛奈正治、水野武男、山口益司
1937年(昭和12年)	山田太郎、河原繁、杉江敏男、高木一、高畠誠二、正村篤二、森下通伯(旧姓:菅原)、横山憲造
1938年(昭和13年)	石原勝、鬼塚正達、川島正治、木村敏夫、黒坂慶太郎、藤田善啓、別所長治、細田胖(旧姓:大沢)、米丸全
1939年(昭和14年)	阿野静資、有地次郎、伊藤弘二、下坪聖之、正村慎一郎、富田尚、新田隆造
1940年(昭和15年)	市川日出男、下田宜孝、高林貞一、竹石多満太
1941年(昭和16年)	河合喜三、浅間俊雄、市川勝太郎、今田公登、佐藤守、高山章、谷尾瀘造、丸山多聞、小島雄次、岩崎新太郎、菊池忠司、乗松慶直、萬谷精一
1942年(昭和17年)	市村健児、枝茂川哲一、岡島丈夫、河野伸二、川辺輝郎、桑山喜作、篠原精一、田中清美、辻博夫、平原芳郎、八木秀俊、山本慶次
1943年(昭和18年)	足立利吉、井上福次郎、宇野省三、加古美雄、川崎浩、草野宣郎、紺谷健一、西村一弥、藤井精一、三浦正義、三好鉄太郎
1944年(昭和19年)	松本規之
1945年(昭和20年)	-
1946年(昭和21年)	-
1947年(昭和22年)	深田次男、小川謙二郎、亀井重一、高畑吾郎、滝政弘、楠慎次
1948年(昭和23年)	[加藤武(3年生)]
1949年(昭和24年)	加藤武、藤原悦二、渡辺三郎、近藤悦哉、安島昭、石田博
1950年(昭和25年)	今田昭(旧姓:竹田)、滝清、永井良一、堀敬介、増島文夫
1951年(昭和26年)	高橋善治、阿左美利男、宮代顕二、川崎昭(旧姓:荻山)、上田将統、佐野国四郎、宮本清治、伊藤道哉
1952年(昭和27年)	山本広、星出寿夫、吉沢淳一、吉村和夫
1953年(昭和28年)	廣瀬俊樹、細見和幸、後藤力
1954年(昭和29年)	木原一行、井上敏光、田中義郎、對馬精一郎、平井恒夫、真木恭二
1955年(昭和30年)	寺尾宏、早川和義、中村睦彦、村田史郎
1956年(昭和31年)	足立勝、島村正雄(旧姓:金)
1957年(昭和32年)	中山弘、浅見二男、小河内裕、斎藤淳、佐藤健次、冨島勇(旧姓:夫)、村瀬健、吉田正礼、渡辺博
1958年(昭和33年)	青木靖、亀山壽、寺尾彰
1959年(昭和34年)	宮本朗、花田仁男、柴田寿一、西田彰生、松浦雄三
1960年(昭和35年)	北島次朗、松田光敏、松原博美、依田義昭
1961年(昭和36年)	[猪原恭一(3年生)]
1962年(昭和37年)	猪原恭一、海老沢卓、遠藤守、沢田秀二、古川正明
1963年(昭和38年)	木原征治、野口俊太郎、大竹捷夫、村田義彦、山本英輔
1964年(昭和39年)	寺本崇、佐野二郎、高田慎一
1965年(昭和40年)	原一孝、稲垣光洋、天明昭雄
1966年(昭和41年)	植中浩、津久井紘一、橋本征治、平尾宏

卒業年	氏名（下線は主将）
1967年(昭和42年)	吉村実、志村進、石田隆次、井上卓三、鏑木宏明、鈴木俊、服部義邦
1968年(昭和43年)	宮本隆三(旧姓:松浦)、青木一、掛井千史、銀谷俊次、細野佳孝、山本忠
1969年(昭和44年)	雨宮三郎、和田明仁、大塚智万、亀井久治、佐藤一誠、(学院卒)加藤英夫、鈴木洋一
1970年(昭和45年)	古田俊次、飯野吉保、小野光久、志澤輝和、山口信英、(学院卒)小島孝之
1971年(昭和46年)	小倉文雄、飯塚勇、桜川修、竹村直樹、早川憲雄、細山武
1972年(昭和47年)	斉藤文雄、伊藤隆勇、中原信義
1973年(昭和48年)	藤井正二、市川哲夫、藤井宗道、橘川雄一、(学院卒)橘川雄一
1974年(昭和49年)	花山健治、児玉英治、平野茂
1975年(昭和50年)	河原茂光
1976年(昭和51年)	浅野毅、井上栄之助、積田勝、佐藤好一、江黒孝、宮崎肇
1977年(昭和52年)	後藤幸男、織井隆司、小森博行、永島誠二
1978年(昭和53年)	國兼実、加々見玄幸、金井保憲、小泉光市、戸井田滋、中西久人、渡辺健司
1979年(昭和54年)	尾﨑剛敏、清水克巳、系野力、西田尚信、荒井喜良(旧姓:大久保)
1980年(昭和55年)	吉川康徳、川本孝司、古峪修一、戸塚昌由
1981年(昭和56年)	松木巌、穴井律郎
1982年(昭和57年)	森樹、仁賀建夫、丸橋大介、田場茂
1983年(昭和58年)	田瀬弘美、廣畑伸雄、吉田暁、中村浩二
1984年(昭和59年)	白石治二、飯島継生、小澤順、坂田陽彦、堤篤彦、馬場吉勝、原聡
1985年(昭和60年)	高桑研一、小田洋一郎、秋元伸英、朝比奈弦一、石津滋人、石田英介
1986年(昭和61年)	飯泉康弘、笠原康彦、蓑田透、吉川雅之
1987年(昭和62年)	和田剛
1988年(昭和63年)	田村保、山内光春、高橋伸一、岡野裕一
1989年(平成元年)	佐々木正人、大林忠正、片平久光、馬杉道弘、小林和典、今林知
1990年(平成2年)	須藤浩治、中居潤二
1991年(平成3年)	落合仁、井上諾、福田充宏
1992年(平成4年)	石田訓、木原太郎、田村将一、根木直樹、早川徳也、山岡三佳(旧姓:才宮)
1993年(平成5年)	太山新一、大曾根弘(旧姓:上鵜瀬)、久我晃広、永穂展栄、山崎壮一郎
1994年(平成6年)	松本剛毅、錦織拓、佐藤曜子(旧姓:志村)、高橋かおり
1995年(平成7年)	坂下公輝、高橋章、園田直
1996年(平成8年)	太山貴夫、荒田健哲、穀蔵修、滝本知広、牧内亮二、橋本美希子(旧姓:楢本)
1997年(平成9年)	金川健太、河村安明、熊林孝、的場善剛、坂口愛
1998年(平成10年)	岩舘直也、小川博嗣、貝本正紀、濱本利寿
1999年(平成11年)	浅利良太、駒田浩之、米山公彦、奥田ひな子、畑井みずき(旧姓:久保田)
2000年(平成12年)	元山貴光、大森悠樹、瀬尾知治
2001年(平成13年)	吉田能克、山本昌辰
2002年(平成14年)	水島秀嘉、市川裕之、片山敬三
2003年(平成15年)	山中健太、佐藤拓也、手塚真樹恵
2004年(平成16年)	西村智和、高橋貴則、松崎光太郎、吉田允
2005年(平成17年)	藤崎嘉一、来田裕史
2006年(平成18年)	水島秀聡、大森友博、高橋亮、八田久範
2007年(平成19年)	前田祐介、安井祐樹 、松山健史
2008年(平成20年)	植田拓郎、鷲田剛、内山修平、波多野大祐、市原麻亜子
2009年(平成21年)	窪田哲士、野本悠太郎、宮野至
2010年(平成22年)	坂田洋平、鷲田健司、崎尾翔、柴田剛、小川淳一
2011年(平成23年)	藤本一平、金内孝、吉田啓太、山本一輝
2012年(平成24年)	多和田雄二、石尾圭佑、大橋敬左、福井玲央、柏美帆
2013年(平成25年)	吉川竜、森川晴貴
2014年(平成26年)	羽田康佑、小野田泰良、コグラン・ショーン、宮田将大、安田大河、柳田洋人、矢野美月
2015年(平成27年)	田中智大、田村真彬、村上桂英、横山拓真
2016年(平成28年)	木村浩一郎、鵜飼慎之介、川原悠雅、佐藤良、中村拓郎、西山健史、大木碧
2017年(平成29年)	宮崎俊哉、岸本昌樹、戸田翼
2018年(平成30年)	宮口和樹、倉田登志矢、是澤勇志
2019年(平成31年)	糸賀俊哉、関修平
2020年(令和2年)	大野誠弥、今村光成、齊藤湧大、中嶋錬、山本健悟、湯本脩嗣、鴨木美雪

卒業年	氏名（下線は主将）
2021年(令和3年)	清水拓登、一色岳登、山下翼、依田星也、金子みなみ
2022年(令和4年)	村上和亮、岩井怜太、大森悠人、黒川理希、本橋大地、和田翔太
大学4年	西本京平、大島新、岡田凌弥、満留優太郎、東郷将史、永澤由衣、平岩佑利、山形真大
大学3年	中島丞一郎、池田大翔、上野里恩、大多田一真、加藤航太、小比類巻周、戸川晴貴、土師香澄、林聖真、山田和輝
大学2年	伊豆藏顕心、岩本捷汰、大森友貴、金岩祐太朗、小宮瑞生、瀬出井香穂、塚谷朋香、保坂航希、三ツ川慶
大学1年	飯島圭佑、黒田悠磨、仁科恒星、佐々木英寿

女子部

卒業年	氏名（下線は主将）
1994年(平成06年)	伊東佳織(旧姓:佐野)、永穂智子(旧姓:小松)、久保田淳子(旧姓:渡辺)、今泉有紀子(旧姓:島津)、大岩以麻子(旧姓:森)
1995年(平成07年)	今西美紀(旧姓:白木)、井手富美恵(旧姓:大野)、伊藤純子(旧姓:阿部)、藤井玲(旧姓:柴田)
1996年(平成08年)	大野真紀子(旧姓:橘)、渡邉亜希子(旧姓:辻本)、城山有理(旧姓:中畑)、伊藤美穂子、前田麻紀子(旧姓:野坂)、中山友紀子(旧姓:本倉)、静夏織(旧姓:林)、川合奈穂(旧姓:首藤)、林房代(旧姓:吉田)、富永裕子
1997年(平成09年)	板谷智春(旧姓:阿部)、久我佳子、橋本かほる(旧姓:藤崎)、ハーソノあゆみ(旧姓:古井)、百木美穂(旧姓:大野)
1998年(平成10年)	池内邦子、荒川理恵(旧姓:吉川)、宇野津玲子(旧姓:福井)、神宮司文
1999年(平成11年)	前田麻友子、佐々木香織(旧姓:吉田)、牧原由紀子、久松美奈子、辻田亜紀(旧姓:綱島)、伊藤有希
2000年(平成12年)	間中麻記子(旧姓:清水)、鮎川洋子(旧姓:原)、石原寛子、深沢麻美(旧姓:植田)、中條加奈子(旧姓:竹川)
2001年(平成13年)	森直子(旧姓:古林)、[三好真美(旧姓:野添)(3年生)]
2002年(平成14年)	三好真美(旧姓:野添)、木川倫子(旧姓:松下)、橘川文夏、正田亜耶子(旧姓:早川)、[木村えみ(旧姓:吉澤)(3年生)]
2003年(平成15年)	田中宏子(旧姓:岩本)、木村えみ(旧姓:吉澤)、井口絹世、河津智子(旧姓:酒井)、澤谷悠子(旧姓:益山)、中内和美(旧姓:能鹿島)
2004年(平成16年)	安岡裕美子(旧姓:楠田)、堀内美里
2005年(平成17年)	[小澤葉純(3年生)]
2006年(平成18年)	小澤葉純、伊藤紫苑(旧姓:河合)、野波愛子(旧姓:山崎)、林久美子
2007年(平成19年)	金本美郷、森田千春(旧姓:塚村)、増井真実子(旧姓:富田)
2008年(平成20年)	箱田梢恵(旧姓:唄)、後藤祐美子(旧姓:林)、吉田真弓、田澤純子
2009年(平成21年)	岩﨑響子(旧姓:山口)
2010年(平成22年)	中井真衣子（旧姓:寺田)、高野禎(旧姓:野澤)
2011年(平成23年)	粕谷美理(旧姓:奈良)、井上陽子、岡野千尋、阿部沙紀(旧姓: 北島)、齋藤実織(旧姓:孤塚)、藤森有美
2012年(平成24年)	高城千佳、石田純子、福代明香(旧姓:西村)、山崎有葉
2013年(平成25年)	長尾千滉(旧姓:末森)、中道麻衣、北村志歩(旧姓:西川)、早勢美沙希(旧姓:芝原)、平井智梨、松本亜衣、望月翔子(旧姓:田中)
2014年(平成26年)	堀部晶瑠、三柴明日香
2015年(平成27年)	松田可奈(旧姓:髙橋)、新舛睦実(旧姓:青山)、吉澤彩花(旧姓:長谷川)、小野田知里(旧姓:荒川)
2016年(平成28年)	本名江里(旧姓:八木澤)、川上彩加(旧姓:渡邉)、柏戸萌子、戸枝百合香
2017年(平成29年)	小澤眞帆、石倉花恋、瀧澤育未、辻村友理、多田晴菜(旧姓:藤本)、村山侑季
2018年(平成30年)	片柳陽加、齋藤里奈(旧姓:安達)、中川雅子(旧姓:梅村)、井上燦、南有紗、稲田くるみ
2019年(平成31年)	瀧澤璃菜、中村咲、福井更彩
2020年(令和02年)	高橋詩帆、有賀瞳、辰野萌、的場朱音、村山陽香、手島潤子
2021年(令和03年)	古屋萌杏、南家未来、橋本実結
2022年(令和04年)	堀山夏帆、足立夏保、加藤清香、川村日南、國岡千乃、森田桜
大学4年	山口永恋、亀田菜月、高橋佑瑠、野田泰佑、原崎ひかり
大学3年	吉野真啓、安藤桜、小川紗知、鈴木千心アヌエヌエ、山下遥
大学2年	内田遥子、坂本智美、鈴木悠、三宅美由紀、山下天海、石原梨子、矢澤花奈
大学1年	窪田ジャスミン、野中ほなみ、長谷川柚希、福田悠、西川航太郎

現役チームの監督・コーチ（2023 年 1 月現在）

男子部　　原聡（監督）、藤本一平（コーチ）、鵜飼慎之介（コーチ）、小黒喬史（S&C コーチ）
女子部　　安岡裕美子（監督）、山下翼（コーチ）、瀧澤育未（アシスタントコーチ）、
　後藤祐美子（アシスタントコーチ）、齋藤裕美（トレーナー）
学院　　原聡（監督）、鵜飼慎之介（コーチ）、大坂真斗（コーチ）

2022 年 8 月 27 日に東伏見で開催された百周年記念 OB/OG/現役交流試合

追記: 早慶ホッケー定期戦の写真、パンフレット（1922 年～2022 年）は、右の QR コード又は下記の URL からご覧ください。

URL:
http://tomonhockey.com/tomon_katsudou_file/People100yearsPDF/WKmatchIndex.pdf

編集後記

早稲田大学ホッケー部百周年を企画するにあたり、最初の課題は、創設年の特定でした。なんといっても 100 年前の話、あちこちから情報を集め、最終的に創設 40 周年の時の記念誌の記述から、1922 年創設、1924 年早稲田大学体育会登録承認ということがわかりました。

その後、過去の情報を読み込んでいくと、1927 年の海外遠征、1932 年のロサンゼルスオリンピックでの銀メダル獲得、1943 年の学徒出陣、防空壕の排出土の片付けから始まった戦後、稲天寮の建設、幻のミュンヘンオリンピック、人工芝グラウンド整備のための資金集めなど、いろいろな歴史の詰まった 100 年だということがわかってきました。

そこで、2020 年 7 月から、稲門ホッケー倶楽部の SNS である NaCAMA を使って、「早大ホッケー部 100 年を築いた人」という連載を始めました。内容は、各年次のメンバーや出来事の紹介です。ほぼ、毎週配信を続け、1923 年卒業生から 2022 年卒業生まで、すべての年代を紹介しました。

卒業生は、それぞれ学生時代約 4 年間の歴史しか体感していないですが、今回、100 年の歴史を俯瞰すると、その重みとともに、次の 100 年に向けて、歴史をつないでいく責任を感じています。

そのような背景から、稲門ホッケー倶楽部では、2022 年を「100 周年記念イヤー」として、大学ホッケー部への寄付活動、OB/OG チームのユニフォームの制作、スコアボードの更新、学生チームと OB/OG チームの交流戦（下記写真）、早慶戦への優勝杯の寄贈、ホッケー部ロゴの制作（裏表紙）など次の時代のための活動とともに、歴史を記録する目的から、記念誌の編集を行いました。

卒業生の方々には、これからも早稲田大学ホッケー部を支援、応援していただくことを期待します。また、改めて、早稲田大学ホッケー部を支え続けてきていただいた大学、卒業生、ご家族などの関係者の方々に深く感謝します。

2023 年 2 月

百周年記念誌編集委員

井上栄之助（1976 年卒）、織井隆司（1977 年卒）、川本孝司（1980 年卒）、田場茂（1982 年卒）、仁賀建夫（1982 年卒）、蓑田透（1986 年卒）

WASEDA
HOCKEY TEAM
SINCE 1922